

# 浅川扇状地遺跡群

—牟礼バイパスA・E地点遺跡—

1982・3

長野市教育委員会  
長野市遺跡調査会

## 序

昭和56年度は、長野市の社会教育、とりわけ埋蔵文化財の保護・調査のためには記念すべき年で、9月には市立博物館の完成を見、そこに集中的に研究を進め得る体勢が整ったことは、将来、学問を進める上で特記すべきことと思われます。

その設立準備期間中に、今回ここに報告する牟礼バイパスの調査が実施されました。増え続ける自動車に対応するための道路の新設事業として、緊急を要した調査ではありますが、保存できない最小限度の地域を指定し精査したものです。一度破壊された遺跡から無残に掘りかえされた遺物は、学術資料としての価値は半減し、人類の文化遺産をも否定しかねないものですが、その破壊から遺跡を守るための事前の調査は、多くの研究者の地道な調査結果と、それらの成果をまとめた学問に期する処の多いことをご承知のとおりです。

今回ここに上梓する、浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスA地点及びE地点、の調査は、従前どおり長野市教育委員会の委託を受けた長野市遺跡調査会が当たりました。現地における発掘調査は、市立博物館学芸員を中心に、夏休中の大学生諸君の参加のもとに進めました。そして、出土した遺物の整理・研究を新設の博物館の研究室でしたものです。

当初、出土する遺物から弥生時代より古墳時代にかけての住居址として、4～5世紀の社会を知る上で重要な遺跡と思われていましたが、その調査が終に近づく、その下層から縄文時代前期の竪穴住居址も発見され、当市において最古の住居址として確認されるにいたり、多くのみなさんから注目される調査結果を得ることができました。

本書は、調査結果を一刻も早く周知するため、その刊行を急ぎましたが、この報告書を通じ、さらに研究の成果を上げられ、原始から古代にかけてのこの地方での人間の歴史解明に役立てられることを希望します。

終に、今回の調査及び報告書の刊行にご協力いただいた長野市遺跡調査会・同調査団はじめ、発掘期間中暴風雨に見舞われたり炎天下にもめげず調査に当たられたみなさん、さらに調査のため地元の体勢をつくられた区長さんはじめ関係者の各位に深くお礼申し上げます。

昭和57年3月

長野市教育委員会 教育長 中村博二  
長野市遺跡調査会長

## 例 言

- 1 本書は住宅宅地関連等施設整備促進事業、一般県道牟礼長野線建設用地内A地点遺跡（若槻東条地籍）及びE地点遺跡（同田中地籍）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野建設事務所と長野市教育委員会との協議に基づき、長野市遺跡調査会が担当実施した。
- 3 資料整理は各調査員の助言をもとに主として次のものが行った。  
A地点 縄文土器（山口）、弥生土器・土師器（青木・直井）、石器（綿田）  
E地点（青木）
- 4 写真撮影は各調査員がこれにあたり、遺物写真及び図版は山口が担当した。
- 5 石器実測図において、表裏2面を図示したものは左図を表面、右図を裏面として記述した。
- 6 遺物観察表中土器については、遺存状態が不良であるため観察できた限りを記し、推定によるものは（ ）内に記した。
- 7 遺構図水糸線上の数字は海拔高度を表す。
- 8 遺物番号は図・図版ともに合致している。
- 9 各章の執筆は整理担当者が分担し、文責を文末に記した。
- 10 調査の諸記録及び遺物は長野市立博物館において保管している。
- 11 本書の編集・印刷関係の業務は長野市教育委員会が担当した。

# 目次

序	
例言	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌	1
第3節 調査会(団)の編成	2
第2章 遺跡周辺の環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 A地点遺跡	7
第1節 遺構と遺物	7
1 概要	7
2 住居址	7
3 土壇	14
4 集石址	19
5 溝状遺構	21
6 遺構外出土遺物	22
第2節 遺物の観察と分析	22
1 縄文時代前期前葉の土器群	22
2 A地点遺跡出土の石器	24
3 溝状遺構出土の土器群	26
4 第1・2号住居址・土壇出土の土器群	27
第4章 E地点遺跡	34
第1節 遺構と遺物	34
1 概要	34
2 トレンチ内土層	34
3 遺物	38

第2節 成果と課題	38
1 土層堆積のあり方と階段状遺構の性格について	38
2 布目瓦について	39
第5章 結語	40

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺図	5
第2図 A地点遺跡地形図	8
第3図 A地点遺跡調査区全体図	9
第4図 第1号住居址	10
第5図 第1号住居址出土土器	10
第6図 第2号住居址	11
第7図 第2号住居址出土土器	12
第8図 第2号住居址出土石器	13
第9図 第3号住居址	14
第10図 第3号住居址出土土器(1)	15
第11図 第3号住居址出土土器(2)	16
第12図 第3号住居址出土石器(1)	17
第13図 第3号住居址出土石器(2)	18
第14図 土塚1～6	18
第15図 土塚出土土器	19
第16図 集石址	20
第17図 集石址出土石器	20
第18図 溝状遺構トレンチ内土層	21
第19図 溝状遺構出土土器	21
第20図 遺構外出土土器	21
第21図 遺構外出土石器	21
第22図 E地点遺跡地形図	35
第23図 E地点遺跡調査区全体図	36

第24図	第1トレンチ内土層	36
第25図	第3トレンチ内土層	37
第26図	トレンチ内出土遺物	39

## 図 版 目 次

第1図版	A地点遺跡調査前近景（南より）・同調査区全景
第2図版	第1号住居址・同遺物出土状態
第3図版	第2号住居址・同遺物出土状態
第4図版	第2号住居址遺物出土状態・第3号住居址
第5図版	土城1・同遺物出土状態
第6図版	土城2・土城4
第7図版	集石址・同完掘状態
第8図版	溝状遺構トレンチ内土層・調査後全景
第9図版	第1号住居址出土土器
第10図版	第2号住居址出土土器（1）
第11図版	第2号住居址出土土器（2）
第12図版	土城出土土器
第13図版	第3号住居址出土土器（1）
第14図版	第3号住居址出土土器（2）
第15図版	第2号住居址出土石器・集石址出土石器
第16図版	第3号住居址出土石器・遺構外出石器
第17図版	調査スナップ
第18図版	若槻小学校見学会・調査団
第19図版	E地点遺跡調査前近景・調査状況
第20図版	第1トレンチ内土層・第3トレンチ内土層（西側）
第21図版	第3トレンチ内土層（東側）

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

県道牟礼長野線は、江戸期より北国街道として善光寺と越後とを結ぶ幹線道路であったが、近年自動車交通の増大に伴い長野～牟礼間での路線拡張の要求が高まり、バイパス路線の新設の運びとなった。

長野市内においてこの路線内に予想される遺跡は5遺跡を数え、各遺跡を便宜的に牟礼バイパスA～E地点遺跡と称しているが、56年度中に予定された事業区内にはA地点遺跡とE地点遺跡が含まれているため、工事の着手に先立ち両遺跡を緊急発掘調査するに至った。

## 第2節 調査日誌

### E地点遺跡

- 7月3日 発掘機材等搬入
- 7月4日 第1・2トレンチを重機により掘削する。地盤が予想外に軟弱であり湧水もみられたため作業は難行する。トレンチ内では遺構面と想定した黒色土が部分的にしか検出されず遺物等の出土もない。
- 7月5日 引き続き第2・3トレンチを掘削するとともに、掘削済みの第1・2トレンチ内を精査する。トレンチ壁に黒色土の階段状起伏があらわれる。
- 7月6日 第2・3トレンチ内を精査するとともに土層図の作成に入る。布目瓦片出土。
- 7月7日 土層図作成完了をもって発掘調査を完了し、トレンチを埋め戻す。
- 7月8日～3月 逐次整理を行いながら報告書を刊行する。

### A地点遺跡

- 8月19日 重機による表土はぎ、調査地中央（第1号住居址）より土器一個体出土する。
- 8月20日 結団式の後、表土はぎの残土整理と検出作業を行う。第1・2号住居址を確認する。
- 8月21日 引き続き検出作業を行い、土城・溝状遺構を確認する。
- 8月22日 小雨模様にて検出作業中止、調査区を拡張し、新たに表土はぎを行う。
- 8月23日 台風のため午前中は作業中止する。午後より測量用杭打ち作業を行なう。
- 8月24日 拡張区においての検出作業により、土城・集石址を確認する。住居址精査開始。
- 8月25日 住居址を掘り下げ精査する。
- 8月26日 引き続き遺構の精査を行なう。調査区南端部（溝状遺構）の土層確認のためトレンチ設定する。

- 8月27日 引き続き遺構を精査する。
- 8月28日 前夜の雨により遺構が水没したため作業進行せず、午後より精査に入る。1号住居址床面下より3号住居址が確認される。
- 8月29日 3号住居址を残して遺構の精査を完了する。
- 8月30日 3号住居址のプラン確認及び精査を行なう。
- 8月31日 確認された全ての遺構の調査を終了し、機材を撤収する。  
以後、資料整理作業及び報告書作成に入る。

### 第3節 調査会(団)の編成

#### 1 調査会

- 会 長 中村 博二(長野市教育委員会教育長)
- 委 員 米山 一政(長野市文化財保護審議会会長)
- 桐原 健( 〃 委員)
- 千野 和徳(長野市教育委員会教育次長)
- 関川千代丸( 〃 嘱託)
- 矢口 忠良(長野市立博物館学芸員)
- 監 事 田中 穂積(長野市教育委員会庶務課長)

#### 2 A地点遺跡調査団

- 調査団長 小林 孚(日本考古学協会会員・須坂高校教諭)
- 調査主任 矢口 忠良( 〃 ・長野市立博物館学芸員)
- 調 査 員 山口 明・青木和明(長野市立博物館学芸員)石上周蔵・直井雅尚・白田美智子・田中正治郎(信州大学学生)荒井 宏(長野大学学生)綿田弘美(立正大学学生)奈須野由美(明治大学学生)小林宇彦(東海大学学生)前角和夫・白沢勝彦(奈良大学学生)
- 調査補助員 水品紫乃・坂口清子・大林育葉・樋口良江・倉島千智(長野市立博物館)

#### 調査参加者一覧

青木通太・荒井五月子・新井長一・梅木こと江・海野幸一・大谷孝子・木賀良平・小林光子・桜井藤吉・笹本弘子・鈴木 赴・鈴木弘一・鈴木忠雄・伝田洋子・徳武邦子・徳武正子・中沢幸太郎・萩原光雄・花岡善恵・原田繁雄・福沢久子・宮下茂子・持田典夫(若槻東条区長新井長一)

### 3 E地点遺跡調査団

調査団長 矢口忠良（日本考古学協会会員・長野市立博物館学芸員）

調査主任 山口 明（長野市立博物館学芸員）

調査員 青木和明（長野市立博物館学芸員）

石上周蔵（信州大学学生）

直井雅尚（ ）

#### 調査参加者一覧

荒井良彦・池田昌繁・石坂 明・梅木こと江・大谷孝子・大塚暁子・大塚覚雄・柄沢英之・木賀 勇・倉石允男・小林俊文・小林史人・小林真弓・小林光子・笹本弘子・高野五郎・高野範子・伝田洋子・徳武邦子・徳嵩浩樹・夏目理太・中沢幸太郎・中村敏也・萩原光雄・原田繁雄・原田六治・原山 功・福沢久子・丸田政博・丸山貞信・宮下たつ子・若林勝之助（田中区区長大塚重蔵・上野区区長大塚覚雄）

### 4 事務局

事務局長 関口 仁（社会教育課課長）

事務局員 吉池弘忠（ ） 課長補佐・文化財係長

◇ 根津伸夫（ ） 主事

◇ 青木和明（ ） 博物館主事

終わりに、発掘調査に際しては参加者御手配の労を各区長氏にお願ひし、また調査から整理報告書作成を通じて、内山信政・笹沢 浩・佐藤信之・島田春生・関 孝一・竹内 稔・原田勝美・宮下健司・樋口昇一・藤森治幸・森嶋 稔・森山公一・山口純一・和田 博の各氏より貴重な御教示をいただいたことにたいし記して感謝するとともにその他調査に御協力いただいた関係諸団体各位に厚く御礼申し上げます。

（事務局）

## 第2章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

遺跡（調査地点）立地の特色を中心にしてAとE地点を別けて記す。ただ遺跡名が浅川扇状地遺跡群と称している点について触れておく。旧長野市の北部はいくつかの小河川によった扇状地上にある。その中で一番大きなものが浅川によるものであり、そしてこの扇状地にのる遺跡と他のものと性格的に分けることができないし、また宅地・水田等になっているため遺跡範囲を予想することができないため、北部の扇状地形上の遺跡を総称してこう呼んでいるにすぎない。それ故にこの遺跡群内の遺跡を称する場合、地点遺跡としてあつかうことにする。

A地点 霊仙寺山に源を発する駒沢川と三登山中腹に水源を有する堂万川・土京川等の河川がおりなした扇状地及び若槻小学校がのる若槻丘陵との関係から複雑な地形を呈している。更に調査地周辺をみると、北からは若槻丘陵の西端と三登山山麓の間、即ち蚊里田八幡宮前面には土京川の影響が大きい扇状地が調査地付近まで顕著である。この扇状地形成後、堂万川が調査地付近の地形を規定しているようである。それは前述の扇状地末端部に旧流路があったようで凹地になり、また現在の川は駒沢川と堂万川が形成した扇状地を縦断するように流下して河岸段丘をつくり、若槻丘陵が南に突出した地点で新旧河川が合う。これ故に調査地は扇状地・河岸段丘でありながら小さな舌状台地状を呈している。南北巾は約50mで、堂万川からの比高は8mを測る。ちなみに調査地（台地）の地目が宅地・果樹園であるのにたいし、旧流路の凹地は水田となっている。

E地点 この地形形成はA地点より単純である。若槻丘陵上の平坦地にやはり三登山山系の一つ湯ノ平山の麓を發した土京川によってつくられた扇状地の東斜面扇端部にある。そして土京川右岸に接し、その比高2mを測る。地目は調査地付近が果樹園であるのにたいし、前面の平坦地は水田が展開する。

蛇足であるが土京山の名の由来についておもしろい話を聞いたので付記しておく。土京山とは「土器」の出る山とのことであった。山城があったためか、又は田中瓦窯址の関係からか意味深いものがあるように思う。

### 第2節 歴史的環境

この地域は三千寺に残る飛鳥仏をはじめ北国往還路道筋にあたり、これによる歴史的事は多く残されているが、本節では調査地付近の考古学的事象を特記したい。

長野市をとりまく長野盆地周縁部の縄文時代の遺跡は少ない。ところが北に行くにしたがっ



第1図 遺跡周辺図

1. 吉古墳群 2. 田子池上古墳 3. ウマヤクボ古墳群 4. 上野古墳群  
 5. 田中窯址 6. 若槻沖 7. 蚊里田古墳群 8. 赤萱平 9. 浅川西条  
 10. 神楽橋 11. 古屋敷 12. 駒沢新町 13. 駒沢祭祀 14. 徳間小学校  
 15. 山千寺古墳群

てその数は増加する傾向にある。この調査地の周辺に確認されている千曲川右岸の遺跡をみると、湯谷遺跡（山麓・前期）、湯谷沖遺跡（扇状地扇頂・前期）、浅川東条遺跡（山麓・後期）、赤萱平遺跡（山麓・早前期）、田子沖遺跡（台地・中後期）があり、未確認・未踏査遺跡に刈田遺

跡（山麓・前期）、二本松遺跡（山麓・早・後期）がある。これらの遺跡規模は、その採集遺物量及び範囲から小規模なものと推定される。

弥生時代では、中期（栗林式）以後、第1節で記した近くの浅川扇状地遺跡群（以降このように称する。）をみると、大規模集落が確認・予想される遺跡は、浅川神楽橋遺跡（中期）、長野吉田高校グランド遺跡（後期・吉田式）、返目付近の遺跡群（後期・箱清水式）を抽出することができる。しかしこの期の遺物分布のあり方をみると、扇状地内においては、徳間遺跡群徳間小学校地点遺跡にみられるように小規模集落が予想される。

古墳時代 集落遺跡として周辺で明確にされているのは古屋敷遺跡にすぎない。この期は浅川扇状地遺跡群の開発が著しかったと理解され、遺跡数は増加しているものの顕著になるのは6世紀以降の後期のことである。しかし、下字木B遺跡、駒沢祭祀遺跡の祭祀に用いられたと考えられる土器には5世紀代のものが多く確認されているのに対し、その集落遺跡・遺構がこの扇状地遺跡群内では皆無に近い。まだ調査が遅れているためと考えられ、今後の調査に期待される。この意味から古墳をみると、古い形態の前方後円墳は地附山1号墳そして三才1号古墳で、他は横穴式石室を有する後期古墳に属する円墳である。駒沢川右岸で展開する古墳をみると、前述の三才1号墳は、千曲川の沖積地を見下す若槻丘陵に接続する南郷丘陵と称する中腹の孤丘上にある他は、三登山山麓部に群集して展開する。西から龍塚古墳を盟主とするように4基が、そして蚊里田古墳群（8基）ウマヤクボ古墳群（4基）・上野古墳群（4基）・円光寺古墳群（3基）田子古墳群（5基）そして善光寺平第2位の群集墳として著名な古墳群がある。この中にはすでに壊滅した古墳が含まれているが、昭和20年代確認されたということは数においても驚きに値する。

奈良・平安時代 この期というよりも平安時代と推定される時期であるが、浅川扇状地に小さいながらもムラの規模をもつ集落がいくつもあった可能性がある。発掘調査されたのみの遺跡をみると、三輪小学校遺跡（4軒）、浅川西条遺跡（21軒）、古屋敷遺跡、駒沢新町遺跡（10軒）そして浅川神楽橋遺跡がある。この他遺跡地名表をみる限り、この期の遺跡・遺物が圧倒的に多い。これは開発が究極を向えたか、これに近い状況にあったことをうかがわせ、開発は更に山間部へ進んでいったようである。

ただ奈良時代に比定される集落はまだない。しかし東山道越後支道（信濃路）の駅家址（多胡）と推定される三才田子遺跡があることが注意されるし、出土遺物に奈良時代のものがある。またこの期の窯址は山の神（豊野町）で確認されている。この他窯址関係では、土京山中腹から水道管理設の際、確認された田中窯址は、E地点直上付近に当たり、また善光寺瓦窯として著名な東沢窯は、田子川が若槻丘陵を削り三才田子に至る斜面に築かれたものであるという。これらはすでに破壊されているようで、今後の発掘確認調査に期待される。尚古瓦出土地として確認できたものに原田勝美さんよりもたらされた山千寺の平瓦と浅川神楽橋遺跡のものがある。

（矢口忠良）

## 第3章 A地点遺跡

### 第1節 遺構と遺物

#### 1 概要(第2・3図)

調査対象地は堂万川左岸海拔高度 396m地点、旧流路と思われる谷地形とにはさまれた舌状の台地上にあたる。台地上は現在畑地として利用されている。調査区はこの内の 350㎡で、重機による遺構面直上までの耕作土除去の後遺構の検出にあたった。遺構面までの堆積は20~30cmと薄かったが、畑作における深耕がなかったため遺構遺物の破壊は少なかった。しかし浅川扇状地上で共通してみられる土器の変質が著しく、土器面はほとんど剝落しきわめて遺存状態が悪く旧来の姿をとどめるものはない。

土層序は黒褐色系の耕作土の下に灰褐色強粘性土が続き、地表下約1mで漸移的に礫を含んでグライ化している。

検出された遺構は竪穴住居址3、土壇6、集石址1、溝状遺構1であった。溝状遺構は、地形を確認するために設定したトレンチ内において検出されたもので、当初自然地形と考えていたが、調査区以外にも試掘を試みたが現流路・旧流路側とも遺構の存在する可能性は薄く、遺構の範囲は調査区から西側に伸びてゆくものと考えられる。

#### 2 住居址

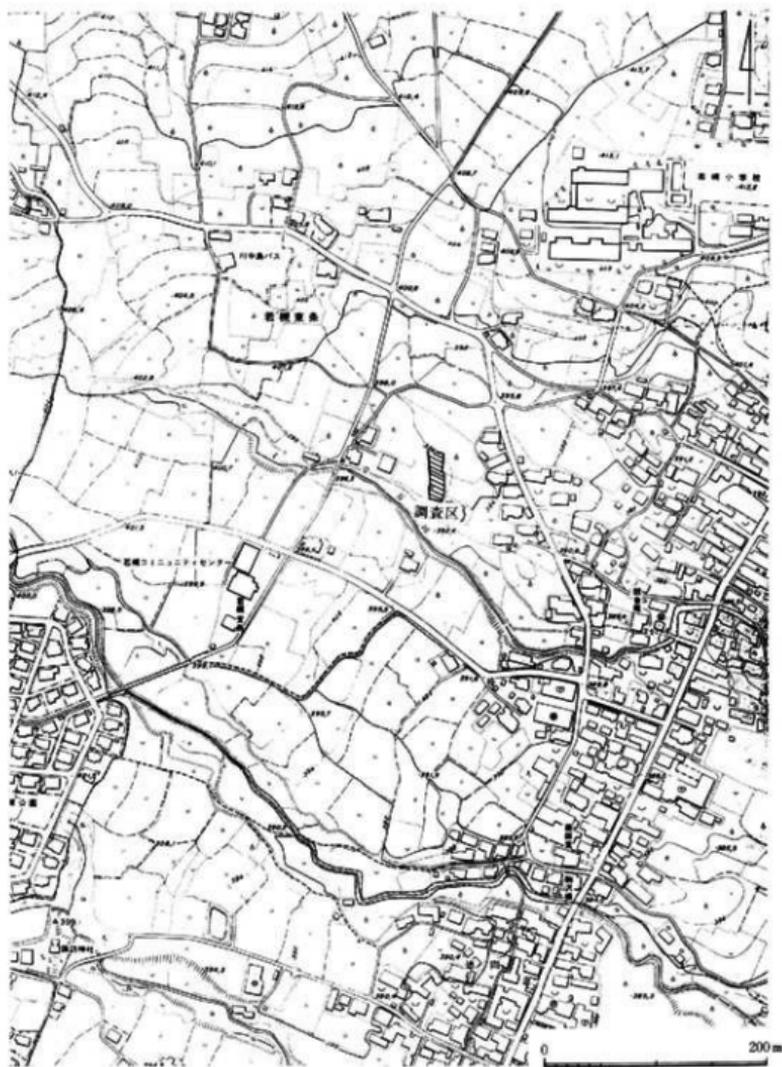
##### 第1号住居址

1辺 2.5~3.5mの不整形を呈しており、中央部東よりに径80cmの肥溜による攪乱がある(第4図)。床面は軟弱であるがほぼ平坦面をなし、確認面から5~15cm掘り込まれている。西壁には段がみられるが構築の際の修正として考えることができる。柱穴と思われるピットが3つ南隅に集中している他ピットを有さず、炉址も検出できなかった。ただし住居址西半部では床面上に木炭が散在していることが確認された。

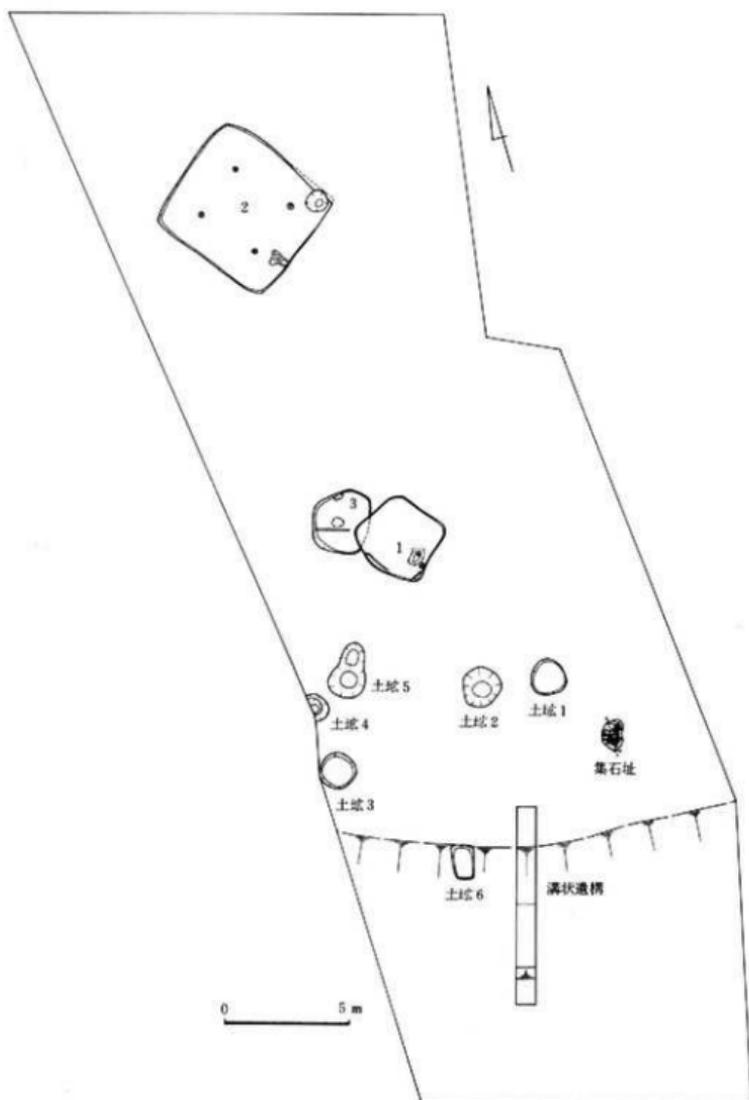
遺物(第5図)は1~3・7・8が床面直上一括出土であり、住居址西隅に集中して存在していた。4・5・9は覆土中から、6は耕作土除去の際に住居址南隅付近より出土したものである。このうち高環2・3は壁際に並んで出土し、2は倒立、3は転倒した状態であった。9は拓本で示した胴部破片の他に同一個体片がかなり認められたが接合するには至っていない。

##### 第2号住居址

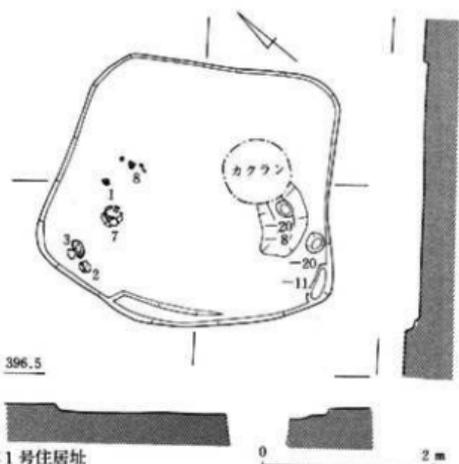
平面プランは一辺 5.5~5.8m、主軸方向N34°Wのほぼ正方形を呈している(第6図)。床面はやや軟弱であるが平坦面をなし、中央部で2cm程の凹みがほぼ同一レベルにある。確認面か



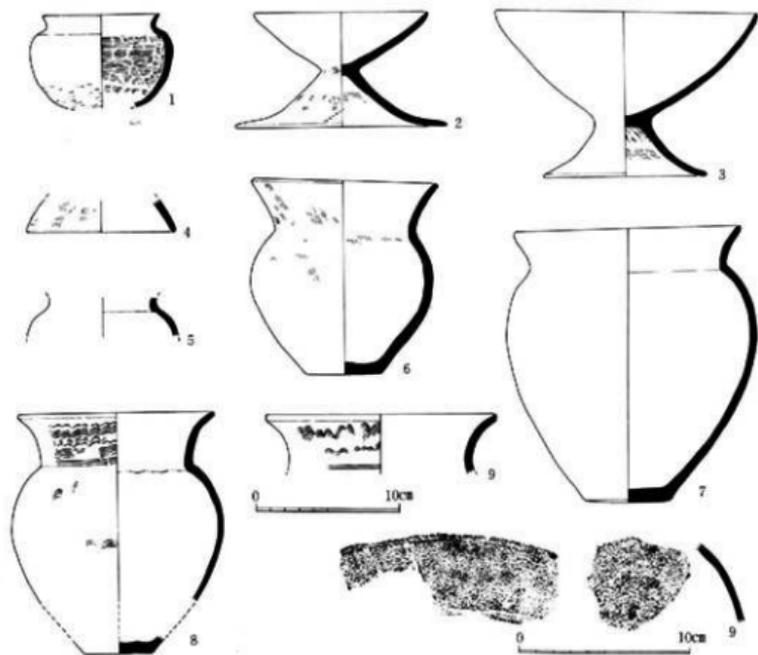
第2図 A地点遺跡地形図



第3図 A地点遺跡調査区全体図

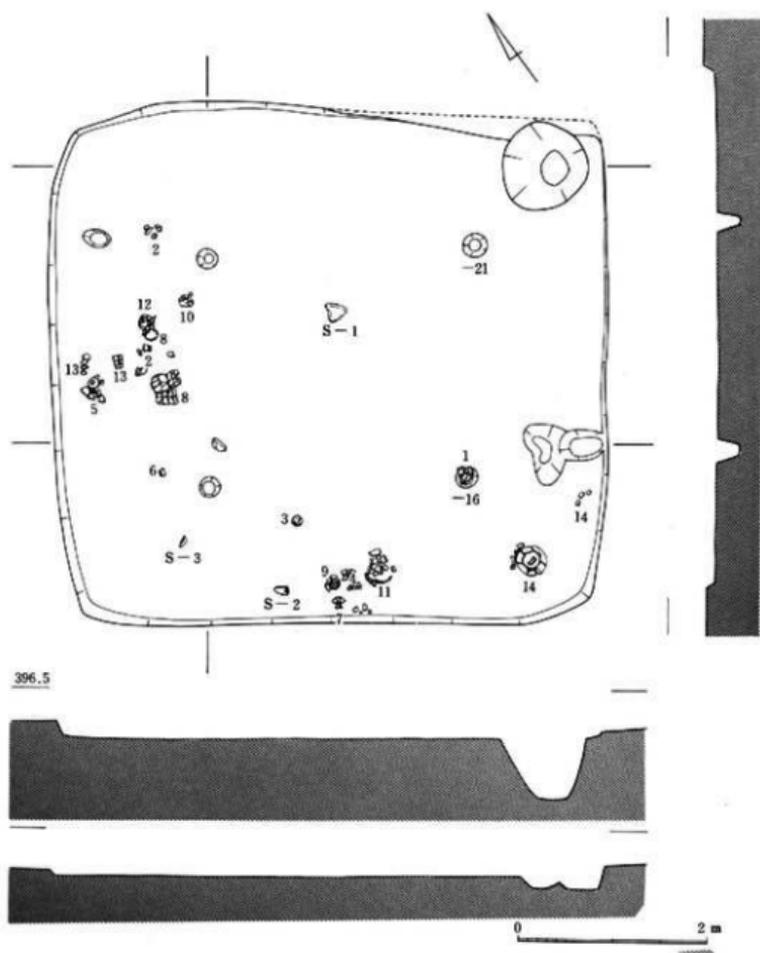


第4図 第1号住居址

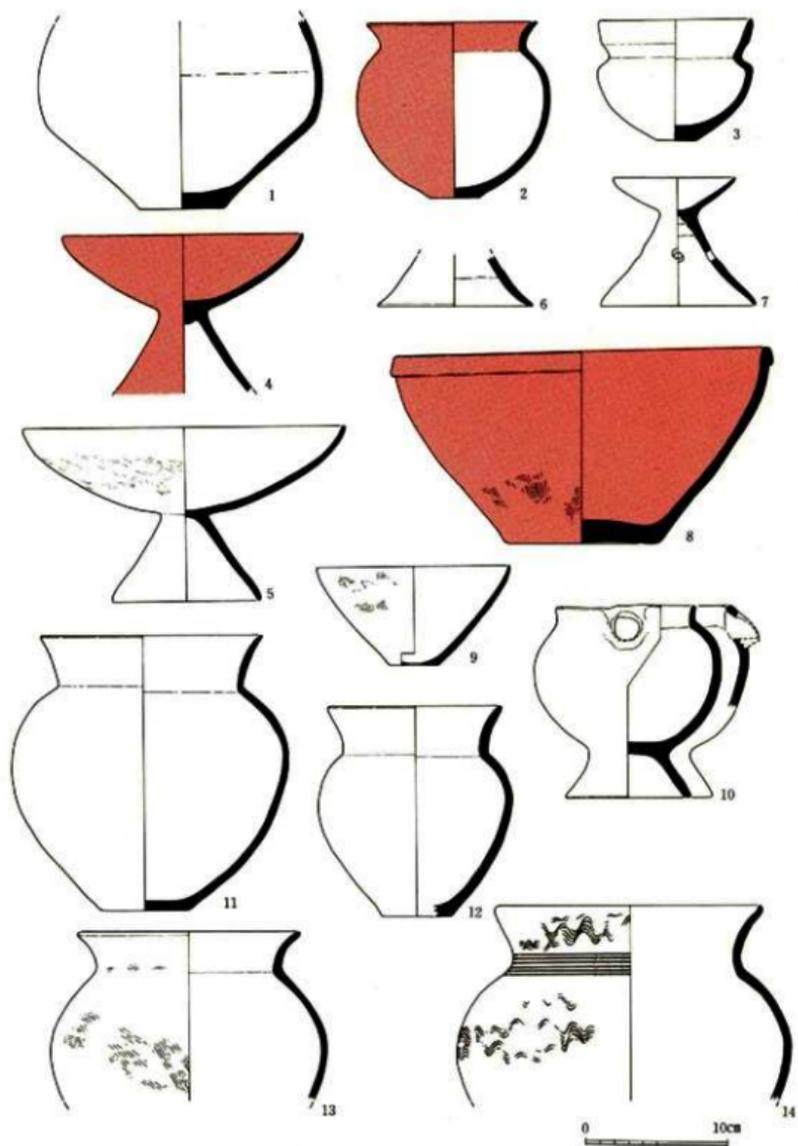


第5図 第1号住居址出土土器

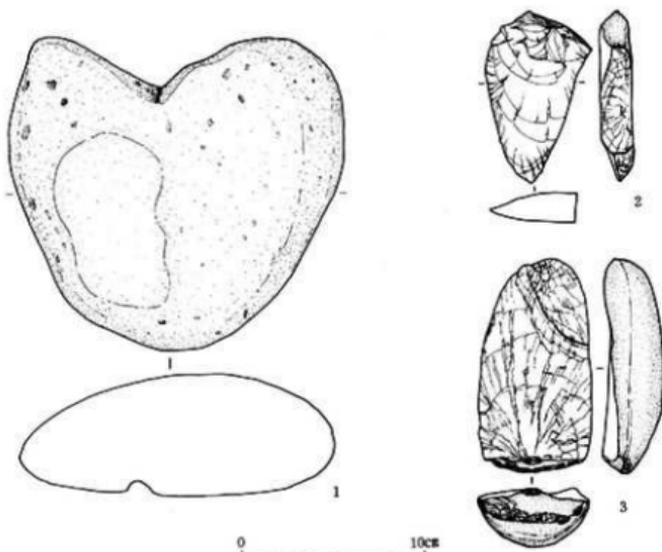
らの壁高は最高で13cmであり、かなり浅い掘り込みとなっているため、東壁の半分近くは壁が失われた状態であった。柱穴は南北2.8m、東西2.5m間隔に方形配列しており、その他北壁よりに小ピットを有する。また入口と思われる南壁西よりの壁際に梯子受け穴と考えられる不整形ピットを設けている他、東隅に直径1m深さ65cmの貯蔵穴を有している。が址は検出できなかった。



第6図 第2号住居址



第7图 第2号住居址出土土器



第8図 第2号住居址石器

遺物（第7・8図）は図示できたものは全て床面直上からの一括出土である。ただし壺形土器1は柱穴を覆う状態で出土し、変形土器14の胴部中位の一部破片は入口梯子受け穴から出土した。土器は復原により完形またはほぼ完形になったが脚部6のみ単独破片で出土した。一括出土土器の多くは押しつぶれた状態で転倒していたが、楕形土器9は正立、変形土器14は胴中位を欠いた擬口縁を下にして正立し、胴中位の破片は入口ピットとその付近に、また壺形土器2と変形土器13は2～3群に分かれて破片が散在していた。

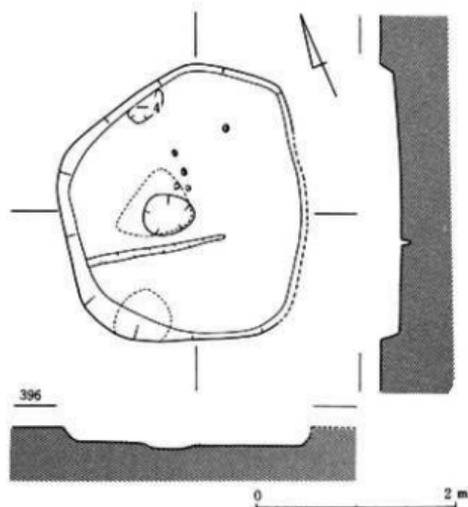
石器は叩き石2点、砥石1点が出土したが、砥石1は住居址ほぼ中央に使用面を下にして置かれていた。

以上の遺物は中央部の砥石を除いて全て西・北壁の壁際と柱穴との間に集中して検出された。

### 第3号住居址

第1号住居址の西隅と重複して検出され、確認面は1号住居址より40cm近く低い。平面プランは隅丸の不整形方で一辺2.7～2.2mであり、壁高は確認面まで24～13cmを計る（第9図）。炉・柱穴は検出されなかったが、住居址中央部と北壁際に浅い掘り込みが見られた。また西壁から東壁に向かって巾5～8cm・長さ1.4m・深さ5～10cmの直線的な溝が検出された。なお覆土中から床面にかけかなりの炭化物が含まれていた。

遺物（第10～13図）は遺構図中破線内が土器片の出土集中範囲である。出土土器（第10・11図）は床面・壁等に押しつぶされた状態のものもあったが、出土レベルは25cmの上下があり床面よりかなり高所での出土もみられた。石器類は、石鏃7点、石錐1点、ピエス・エスキューユ1点・磨石3点などが検出されたが、この内磨石(第13図)は床面直上において出土している。



第9図 第3号住居址

### 3 土塚（第14図）

#### 土塚1

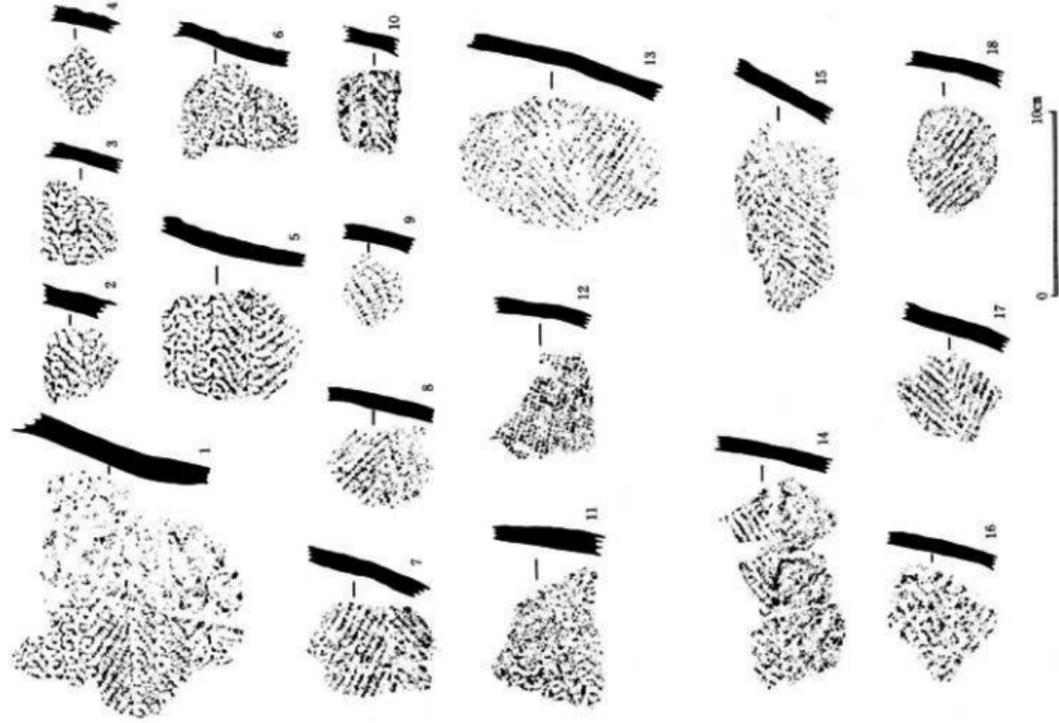
最大径 1.5mの円形プランで、深さは確認面から15cm内外の浅い掘り込みである(第14図1)。  
 坩底はほぼ平坦面をなし、掘り込みは直に近い。

遺物（第15図1・2）は覆土中Ⅲ層より壺形土器破片と完形の高杯形土器が出土しており、このうちの高杯形土器は倒立した状態で検出された。その他長さ約1cmの鉄塊が検出されたが原形をとどめぬほどにさびている。

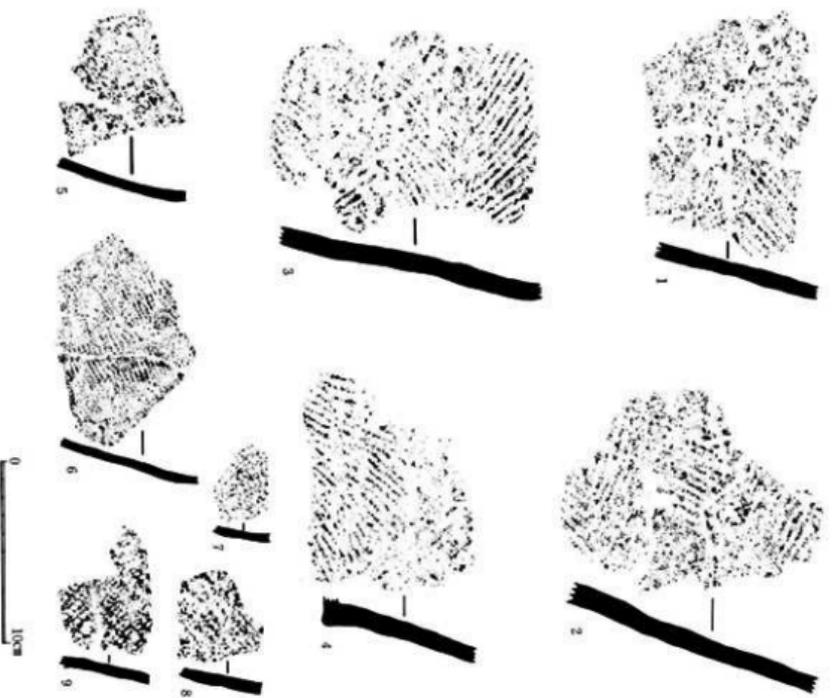
#### 土塚2

土塚1の西側に1.1mへだてて並んで掘削されており、最大径1.7mの円形プランを呈している（第14図2）。掘り込みは直ではなく北側にはわずかに段を有しており、深さは確認面から70cmを計る。

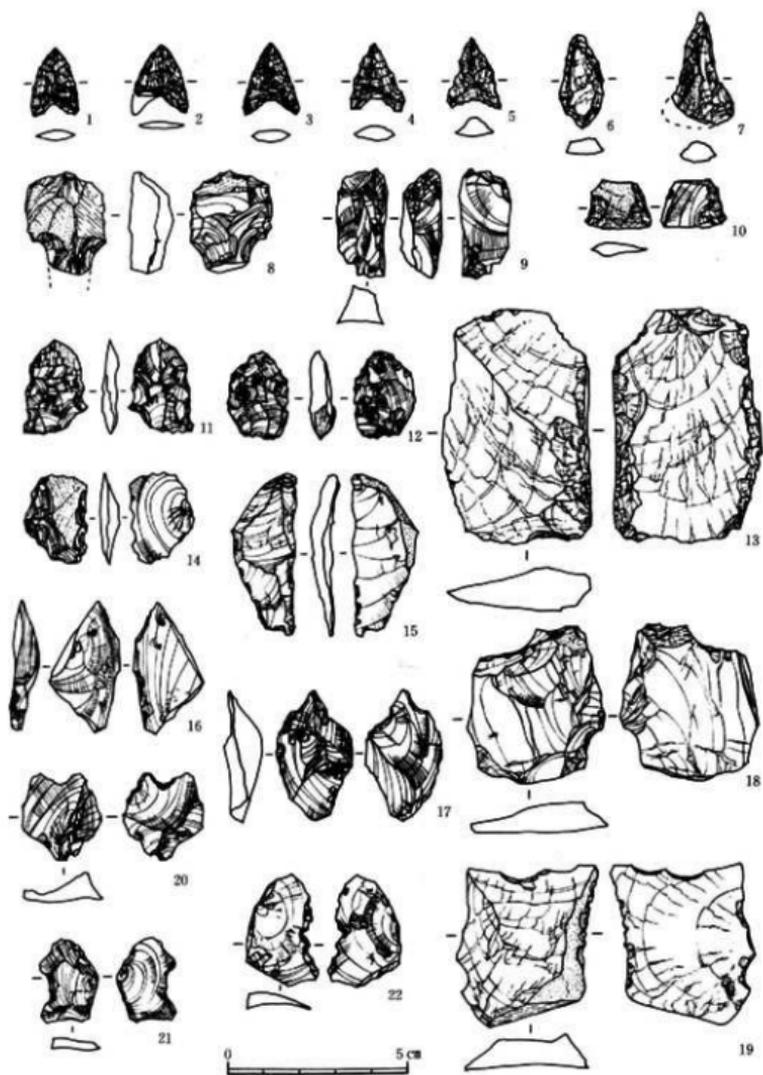
遺物（第15図3～5）は覆土中Ⅱ層より出土したもので、完形の甕形土器、高杯形土器と高杯形土器の坏部破片が検出された。これらの遺物はⅢ層上面に投げ込まれたような出土状況を示していた。その他Ⅲ層中より若干の土器小破片が出土した。



第10圖 第3号住居址出土器(1)



第11图 第3号住居址出土土器(2)



第12图 第3号住居址出土石器(1)

### 土坑 3

平面形は直径 1.5m の円形で、深さは確認面より 25cm を計り、比較的浅い掘り込みとなっている(第14図 3)。掘り込みは直に近い。

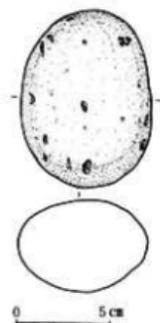
遺物は覆土中より土器片 50 点余が検出されているが、全て小破片で図示できるものはない。

### 土坑 4

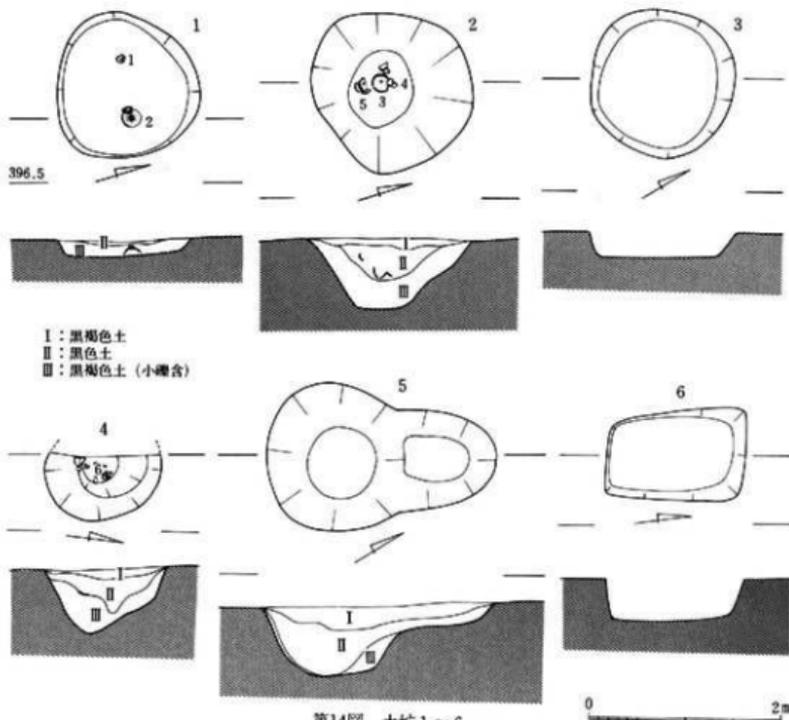
最大径 1.2m の円形プランと思われ、掘り込みの深さは確認面より 55cm をはかる(第14図 4)。西側 1/3 は用地外のため未掘である。

掘り込みは中位まで直に近いが段をもって底面に至り、底径は約 30cm である。

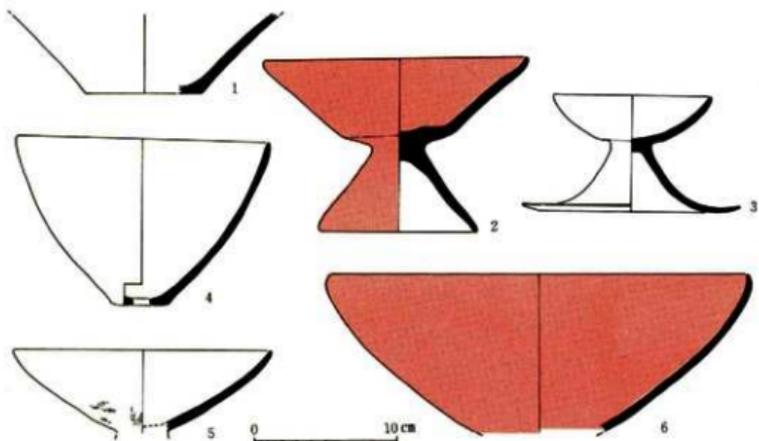
遺物(第15図 6)は覆土中Ⅱ層より高坏形土器の坏部片が検出され、



第13図 第3号住居址  
出土石器(2)



第14図 土坑 1～6



第15図 土塚出土土器

Ⅲ層上面に破片が散乱した状況であったが復原の結果全てが接合した。この他Ⅲ層中から土器小破片9点が検出された。

#### 土塚5

平面形は長さ2.35m、巾1.5～1mの瓢形をしており、巾の広い部分が底面円形で深さ70cm、巾の狭い部分が底面楕円で深さ25cmを計る（第14図5）。土塚4と40cmをへだてて存在している。

遺物は覆土中より土器片50点近くが検出されたが、全て小破片で図示できるものはない。

#### 土塚6

溝状遺構の黒褐色土中に掘り込まれたものであったが、覆土中に黒色土・黄褐色土のブロックが含まれているため確認することができた。長さ1.45m、巾70～95cmの方形を呈し、確認面からの深さは45cmを計る（第14図6）。掘り込みは直に近い。

遺物は図示できるものはないが、覆土中から土器片8点が検出された。この内4点が中世内耳土器の同一個体破片である。

### 4 集石址

半円形に近い平面形を示す土塚をともなう集石址である（第16図）。土塚は最大長1.35m、巾0.9m、深さは確認面より20cmを計る。集石は覆土中1層に包含され、拳大の円礫を中心に

して密集しており、その数は 225個に及んでいる。  
 集石中には火熱を受けて変質したり割れたりしたものも含まれていた。焼土は検出されなかったが、II層中には炭化物が含まれていた。

遺物(第17図)は集石中に特殊磨石1点を含む磨石7点が含まれていた他、黒曜石製の石鏃破片1点が検出されたが、土器片の出土はなかった。



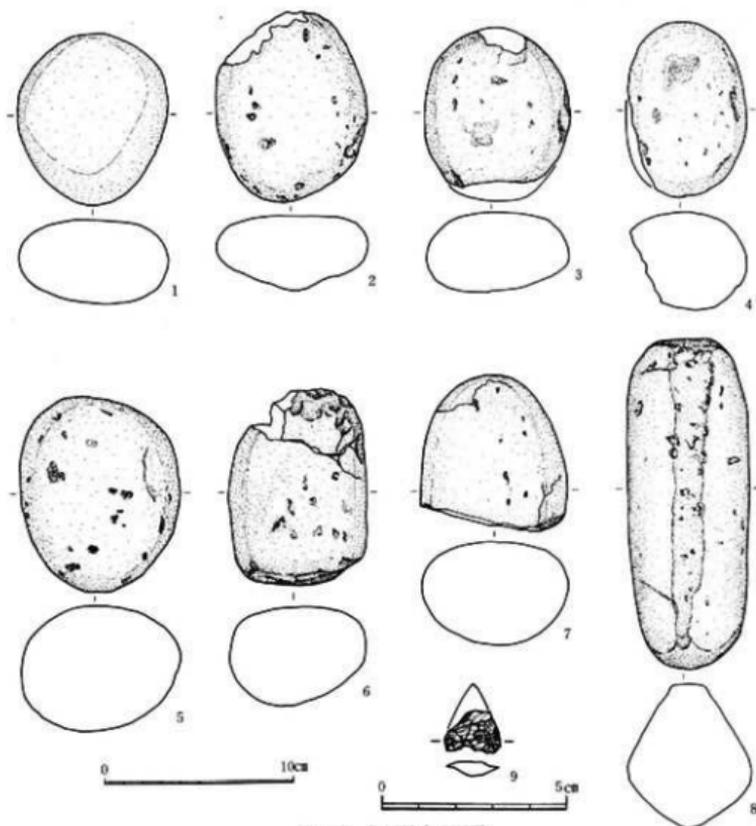
396.5



- I : 黒色粘質土
- II : 暗灰色土 (炭化物含)
- III : 茶褐色砂質土

0 2 m

第16図 集石址

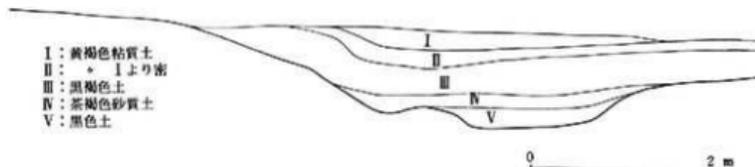


第17図 集石址出土石器

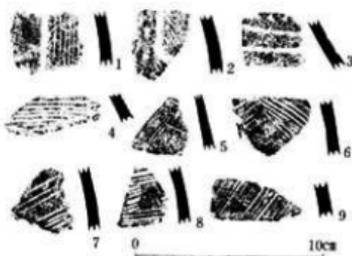
## 5 溝状遺構

調査区南側を横断してゆく溝状の遺構である(第3・18図)。落ち込みの南端は巾1mのトレンチ内において確認したのみであるが、北側の落ち込みラインを追うと等高線に沿うようにゆるやかなカーブを描いていることがわかる。トレンチ内での溝の巾は約5mで、溝底面には北側に階段状の起伏がみられた。溝の深さは北側確認面から計って1m、南側からは50cmで、溝壁は比高差をもって同一レベルとはなっていない。

396.5



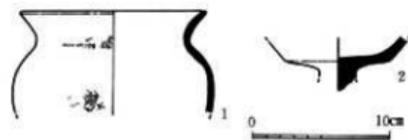
第18図 溝状遺構トレンチ内土層



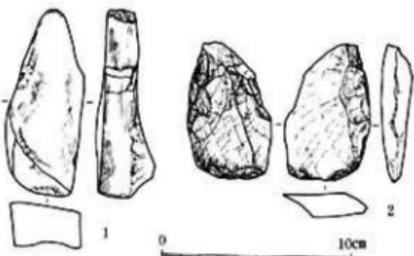
第19図 溝状遺構出土土器

遺物(第19図)の包含層はセクション土層図中Ⅲ～Ⅴ層であったが、特にⅣ層が主たる包含層で、50点近い土器片が出土した。それらは全て小破片で磨耗が著しく図示できるものは拓本によって示したが、胎土には他の遺構出

土の土器群と明確な差を有している。それらには胎土中に砂粒・小石を多く含み、特に赤く発色している鉄成分質と考えられる小石を大多数のものが含有しているのに対し、本遺構Ⅳ層中より出土した土器群にはそれが見られず精選された胎土状況を示している。



第20図 遺構外出土土器



第21図 遺構外出土土器

## 6 遺構外出土遺物（第20・21図）

土器2個体と打製石斧破片（第20図・21図2）は溝状遺構検出中に出土したもので、Ⅲ層上部あるいはその上面に位置していたものである。第21図1は砥石と考えられるものであるが、調査区中央部東側の遺構確認面より出土したものである。（青木 和明）

## 第2節 遺物の観察と分析

### 1 縄文時代前期前葉の土器群

第3号住居址内より一括出土したもので、縄文時代前期前葉に属する土器群である。出土破片総数は約170点ほどで、量的には少ない。また全体の器形を窺えるものはない。

これらの土器群は繊維の有無によって二類に類別される。以下、各類別に記す。

#### 第1類土器（第10図・第11図1～4）

本類は繊維を含むことで類別される。黒褐色ないし赤褐色を呈し、厚手の土器で、焼成はよくない。内面の整形も粗である。胎土に小砂礫を多量に含む。第10図12・13は本類の中では内面の整形が比較的丁寧に行なわれており、繊維痕をほとんど残さず、焼成も他に比し良好である。

第10図1はO段3条のRLとLRの二種の原体を羽状に配し、末端にはループ文をつけて処理している。上方部分ではLRとRLのループ部分を3段にわたって、交互に施している。これらの原体の圧痕の長さは1.5cm～2cm前後であることが観取される。また下部には竹管状工具による波状文がみられる。第10図2～11・13・14も同様に末端にループがつけられている。中でも11は数段にわたってループ文の圧痕がみられる。

第10図15・17・18はO段3条の縄文のみで回転施文されている。

第11図1は外面の器肌が荒れ、繊維痕が浮き出ている。右上には多条のLRが観察される。2は異なる原体を用いて羽状に何段かに構成される。3も2と同様に羽状に施され、末端にはループ文がつけられる。4は底部の破片で上げ底状になるとみられる。

第10図14・15・17、第11図1～4は同一個体で、底部及び底部近くの破片である。これに比し、第10図1～13は胴部ないし胴上部のものである。

#### 第2類土器（第11図5～9）

本類は繊維を含まず、薄手のものである。茶褐色あるいは黒褐色を呈し、器厚は5mm前後である。また本類は第1類より多量の小砂礫を含み、焼成はあまり良くない。第1類とは一見し顔つきが異なる。器厚・縄文の違いにより、更にa・bの二種に区別できる。

a種 5・6は細かい縄文が施文され、器厚が5mm程度のもの。器面の現状が悪く、原体は判別しがたい。

b種 7～9はa種より若干厚く、施文される縄文原体がやや太いものである。これらも器

面の現状が悪く、明確には判別しがたいが2段の縄で、多条の縄文ではないように観察される。図示した4点の資料以外は小破片のため、拓影化しなかった。

以上の各類を出土点数よりみると、第1類は120片あまりで、第2類は50片あまりを数え、第1類が第2類を凌駕する。その他観察しえた点について、まとめておきたい。

#### 第1類土器

(1) 出土した土器片は、胴上部から底部に至るもので、口縁部についての情報は得られず、口縁部文様帯を持つのか、縄文だけで構成されるのか等については知り得なかった。

(2) 器形では全体の形状を窺える資料はないが、察するところ底部から口縁に向かって、ゆるやかに開き、口縁部がやや外反する器形をとると思われる。

(3) 縄文では、O段2条ではなくO段多条によるRとLが使われ、末端はほとんどループに処理されている。そのループの部分だけを何段にも重ねるものが多い。ループを縦に重ねる場合は、LとRを交互に配して、装飾的效果をあげている。

羽状縄文では、結束第一種によるものは全くみられない。羽状にする場合は全て、異なる2段の原体を用いている。

正反の合、束の縄文などはみられない。

#### 第2類土器

中・南信で最近確認された類の胎土に金雲母を持ち、裏面に指頭痕を残すものは本遺跡では確認されていない。

以上第3号住居址出土の土器群は、2類に類別されたが、県内においてはどのように位置付けられる資料であろうか。

中部地方においては、当該の時期には神ノ木式・中越式が設定されている。しかしながらいままで、型式内容の実体が明確化されず、型式名のみが編年の尺度として専ら用いられてきたように思われる。

近年における中央道の調査では、十二ノ后・千鹿頭社・阿久等で良好な資料が検出され、単に編年の問題に止まらず、生活の実態にまで肉迫しようとしている。

特に阿久遺跡は前期のほぼ全般にわたって、ぼう大な数の住居址・土坑・集石が検出され、いまや阿久ぬきには縄文時代前期を語れないほどである。

中央道等で調査された該期の資料は中・南信に属するもので、北信での分布は希薄であり、下高井の伊勢宮遺跡その他で断片的に知られるのみで、まとまった資料はいまのところみられないようである。

また中・南信にあつては、中越式・神ノ木式のほかに東海系の清水ノ上式、関西系の土器などが入り込んでおり、複雑な様相を呈している。地域的なあり方が特に問題となるところであろう。

さて、本遺跡第3号住居址出土の土器群は、中越式・神ノ木式の両式と時期的にはほぼ併行関係にあるかと思うが、型的には両式とは異なる内容を有するものである。第1類土器は、

ルーブ文の多用・0段多条の原体の使用・上げ底である点などより、中部的色あいより、むしろ関東的な様相が強く、従って関山式系に比定される内容を有するものである。この点については、信濃史料第一巻で「千曲川流域発見土器の中には、関東地方の関山式に酷似するものが多い反面、少なからず南信地方の神ノ木式土器の影響であろうところの刺突文のある土器及び無機維土器が存在」するとの確に地域的なあり方について既に指摘されている。

第2類土器の薄手無機維土器は器厚の点では類似するが、器面に斜縄文が施文されるなど所謂「中越式」とは趣きを異にするものである。中信で該期に伴出する胎土に金雲母を持ち、裏面に指頭痕をもつ類とも異なり、いまのところ、第2類に類するものはあまり知られていないようである。

本遺跡を含めて、北信には資料が少なく、これ以上の論及はしがたいが、当該地域における一つのあり方なのであろうか。これからの資料の蓄積を持ちたい。

現在、前期前葉における研究は資料の増加と相俟って、再検討の気運が盛りあがっている。阿久等の報告によって、大きく研究の深化が期待されるところである。単に編年研究に終始することなく、広範な視野から該期の複雑な動態を究明していかなければならないであろう。

本遺跡の竪穴一括資料を北信における該期の一つの資料として報告しておく。(山口 明)

## 2 A地点遺跡出土の石器

### (1) 第2号住居址(第8図)

剥片(2) 原面材面の縦長剥片である。泥岩礫の角に加撃しており、バルバスカーが顕著である。表裏とも調整は行なわれていないが、左側縁は礫皮側から折り取られている。下層の縄文時代遺物の混入の可能性がある。

敲石(3) 楕円形の泥岩礫を利用した敲石が、両極からの打撃によって半折したものであろう。やや尖った下端には打列痕が並んでいる。

砥石(1) ハート形の扁平な安山岩の表面に、一箇所顕著な磨滅部分をもつ。裏面の凹は人為的なものではなからうか。

### (2) 第3号住居址(第12図・13図)

本住居址からは石鏃7、石錐1、ピエス・エスキュー1、小形剥片石器13、磨石3、合計25点の石器と、剥片・砕片89点が検出された。

石鏃(1~7) 1~5は凹基鏃である。1・3は両面とも入念に押圧剝離が行われ、整った形状である。2の裏面は周縁のみに細かな調整が加えられている。4・5は急角度の剝離が施されて厚味があり、5の断面は三角形に近い。6・7は凸基鏃である。6は柳葉形で裏面からの急角度の剝離が施されて断面は台形を呈する。7は基部が大きく、先端は細い。両側縁からやや急角度の調整を加えている。石錐かもしれない。石質は1~4が黒曜石、5~7が泥岩である。

石錐(8) 黒曜石の礫核を素材とし、摘み部分に礫皮を残している。両側縁からの大まか

な剥離で太い刃部を形成している。

ピエス・エスキュー(9) 黒曜石の礫核を素材としている。平面は長方形、断面は台形を呈する。4面とも上下端から交互に剥離痕が入り、右側縁の上端には細かい碎屑の剥落した痕跡が残る。上端は潰れ状をなし、下端は左側面に走る剥離に連なる階段状剥離となっている。

小形剥片石器(10~22) 前述のような定形化された石器に比定できず、明確な分類基準の確立していない剥片石器を便宜的に小形剥片石器と総称する。形態に統一性が認められないが、連続的な2次加工で刃部を形成する石器、肉眼で縁辺に小剥離痕が観察できた剥片を本類とした。製作技術、刃部形態の特徴から以下に分類する。

I類 両面に調整が行われるもの。

a種(10) 薄い剥片の側縁に深い調整剥離痕が並ぶもの。礫皮を残す表面は両側縁を、裏面は厚い右側縁を調整されている。本例は石鏃製作中に裏面右側縁上端の剥離の際に先端を折損したものである。黒曜石である。

b種(11・12) 剥片の周縁からやや不規則な深い調整が行われたもので、上端が狭い。尖頭部の作出を意図したものとすれば、石鏃未成品とも考えられる。2点とも黒曜石である。

II類 片面調整を主とするもので、意図的に刃部を作出したものとそうでないものがある。

a種(13・14) 平面が長方形を呈する剥片の長軸に平行する側縁に片面調整を施して刃部を形成するもの。13は原面打面の縦長剥片の裏面右側縁に連続的な調整を加えて直線的な刃部を作出した、典型的なサイド・スクレーパーである。表面の右側縁に礫面が残り、この部分の厚味を取り除くために両面から調整される。流紋岩質凝灰岩である。14は小形の横長剥片の表面両側縁を調整している。黒曜石である。

b種(15~17) 明瞭な調整で刃部が形成されておらず、剥片の直線状または凸形の縁辺に小剥離痕が認められるもの。15は縦長剥片の、主として表面両側縁の下半部に小剥離痕が残る。16は横長剥片の裏面の側縁の一部に小剥離痕をもつ。反対側の側縁は切断面となっている。17は分厚い横長剥片の両側縁に、部分的に小剥離痕が並ぶ。15はチャート、16・17は黒曜石である。

c種(18~22) 明瞭な調整剥離による刃部をもたず、剥片の縁辺に凹形またはノッチ状をなす小剥離痕があるもの。18は表面の上端左半部分と、下端と右側縁の接する部分の凹形の縁辺に小剥離痕が残る。19は方形を呈する剥片の3辺が機能部分である。20は剥片の裏面上端にノッチをもつ。21は表面の左側縁にノッチがあり、右側縁は両面から調整されている。22は横長剥片の縁辺に鋸歯状の小剥離がある。石質は18がチャート、19が泥岩、20~22が黒曜石である。

剥片・碎片 形態的には小形剥片石器と判別できないものも多いが、調整・使用の痕跡が観察されなかったものを本類とする。総数89点が検出され、石質別の内わけは次のようである。黒曜石69点(111g)、泥岩10点(86g)、ホルンフェルス6点(37g)、流紋岩質凝灰岩4点(26g)、黒曜石以外は遺跡近隣において容易に採集できる石材である。

磨石(第13図) 3点検出されたが、2点は遺存状態が悪く図に堪えない。図示できたもの

は手頃な楕円形の安山岩礫の両面が磨面となっている。

### (3) 集石址 (第17図)

集石址からは安山岩礫 225個が検出されたが、このうち磨石7点特殊磨石1点が含まれ、石礫1点が検出された。磨石としたものと、石器と認められなかった礫とは、大きさ、形態上では差がないものが多かった。また、両者ともに火熱を受けたものとそうでないものがあつた。

石礫(9) わずかに凹基を呈する石礫で、先端を折損している。黒曜石製。

磨石(1~7) 1~3は平面が楕円形で、比較的扁平である。いずれも表裏両面が磨面となっている。2・3は被熱のため、一端が剝落している。4~6は断面がやや円形に近く、6はほぼ球形を呈する。いずれも上下端を除き、ほぼ全面が磨面となっている。6は被熱のためボロボロになっている。7は被熱により下端がはじけているが、右端にわずかに磨面が残る。原形はスタンプ状を呈し、表裏面のほか下面も磨面であつたと思われる、すべて安山岩である。

特殊磨石(8) 平面が長楕円形、断面が菱形の安山岩礫の、もつとも尖つた1稜を機能部分としている。礫皮よりもこの磨面のほうがザラザラになっている。被熱により赤変している。

### (4) 遺構外 (第21図)

砥石(1) 緻密な泥岩製の砥石である。表面と両側面の3面を砥面とし、縦位または斜位の細い線状痕が認められる。金属器を対象とする砥石と思われる。裏面は剝離面となっているが、定形的な砥石が破損したものであろうか。

打製石斧(2) 泥岩製で、頭部を欠損している。表面は右、裏面は左からの加撃による横長剥片を素材とし、一方の側縁は両面から調整されている。刃部には磨耗痕が認められる。この範囲は表面が優越し、刃先では縦方向の線状痕となっている。(綿田 弘美)

## 3 溝状遺構出土の土器群 (第19図)

溝状遺構からは第IV層から多くの土器片が検出されたが、それらは前述したようにほとんどが磨耗著しく原形を失つた小破片であつたが、その中に文様を確認できるものがいくつか認められた。1~3は壺形土器頸部から胴部にかけての破片で、懸垂横帯文(1・2)・鋸歯文(3)の一部と考えられる。1には櫛描縦線文、2にはわずかに縄文が残っている。4~9は壺形土器破片と考えられるものでいずれも櫛描により、横線文(4)、羽状条痕文(5~7・9)を施している。これらの文様にみられる特徴は北信地方弥生中期栗林式にみられるものであり、本土器群をそれに比定することが妥当である。

浅川扇状地遺跡群の中には該期の遺跡がかなりみられ、調査例に徳間小学校地点遺跡(長野市教委 1979)、神楽橋遺跡が知られている。このうち徳間小学校地点遺跡では住居址2軒が確認されており、本報告は未だないが神楽橋では実に44軒もの住居址とともに溝状遺構も検出さ

れているとのことである。

これらのことより浅川扇状地上には該期の遺跡がかなり存在するものと考えられ、本遺跡の位置する台地上にも小規模な集落の存在が予想されるところである。今回発見された溝状遺構は弥生中期集落の付属施設として理解できるものであり、未発掘の調査区西側に該期の住居址が存在する可能性は高いといえる。

#### 4 第1・2号住居址・土坑出土の土器群

##### (1) 土器群の分類

今回の調査では2つの住居址と土坑中より、多くの完形品を含む土器群が検出されたわけがあるが、それらはさほどの時間差をもたない一時期の土器様相を示すものと予想される。この土器群を分析してゆく上で次のような形態分類を試みた。(記号はSB-住居址、SK-土坑を示し、SB1-1は第1号住居址出土土器図中1の土器を意味する。)

- 壺 a** 〈SB2-1・SK1-1〉 胴上半は欠き全形を知ることはできないが、胴下半に最大径を有しており、底部から内反りを有して胴下半に至る器形である。胴上半から頸部までは半球形に近いものと考えられる。
- 壺 b** 壺に近い形態を呈しているが整形等からも壺とは区別されるもので、広頸壺とでもいふべき器種である。
- b1** 〈SB1-6〉 最大径を胴部中位に持ち、口縁部が直線的に長く屈折する形態を呈している。胴部内面には指頭によるおさえつけ痕・ナデ痕がそのままに残され壺としての煮沸機能は考えられない。
- b2** 〈SB2-2〉 最大径を体部中位に持つ球形胴で、口縁部が短く外反する形態を呈する。胴部内面と底部を除いて赤色塗彩されている。
- 甗 a** 〈SB2-3〉 肩部が張り口縁部が内湾ぎみに立ち上がるものである。口縁部は肥厚し、頸部くびれとの中間に若干の段を有している。
- 甗 b** 〈SB1-1〉 口縁部が短く外反し胴部は扁球形を呈している。底部は失われているが丸底に近くなるものと思われる。
- 高坏 a** 〈SB2-4〉 口縁部径が15cmを越えるもので、脚部高が坏部高を凌ぐ形態を呈する。脚部内面を除き赤色塗彩されている。
- 高坏 b** 口縁部径が15cmを越えるもので、脚部高が坏部高と同じかそれ以下となる形態を呈する。
- b1** 〈SK1-2〉 坏部に段をもち脚部が内湾する形態を呈する。脚部内面を除き赤色塗彩されている。
- b2** 〈SB2-5〉 坏部に段をもたず内湾しながら大きく開き、脚部もわずかに内湾する形態を呈する。
- b3** 〈SB1-3〉 坏部高が脚部高を凌ぎ、脚部が外反する形態を呈する。坏部は深

みをもつ鉢形である。

**高杯 c** 口縁部径が15cm以下のもので、脚部径がそれを凌ぐ形態を呈する。

c1: 〈SK2-5〉 杯部にわずかながら段を有し、脚部端がはね上るほどの外反を示す。

c2: 〈SB1-2〉 杯部が直線的に開き×字形に近い形態を呈する。

**器台** 〈SB2-7〉 受け部と脚部とが貫通せず、脚部に4孔の透し孔を有して端部が内弯する形態を呈する。

**鉢** 〈SB2-8〉 折り返し状口縁を有し内弯ぎみの体部形態を呈する。底部を除き赤色塗彩される。

**台付注口** 〈SB2-10〉 直立する短い口縁に注口を有し、球形の胴部に脚台を付した形態を呈する。

**甕** 〈SB2-9・SK2-4〉 内弯ぎみの鉢形土器底部に1孔を有する形態を呈する。

**甕 a** 口縁部と胴上半に櫛描波状文、頸部に簾状文を施文するものである。

a1: 〈SB2-14〉 口縁部が長く伸びて外反し、端部がツマミ上げ状の内弯形態を呈する。頸部くびれは鋭くないが、胴上半(肩部)は大きく張り出す。

a2: 〈SB1-8・9〉 口縁部が長く伸びて外反し、端部は面取りされる。頸部はくの字状に屈折し、最大径を上半にもつ卵形の胴部形態を呈する。

**甕 b** 無文のものである。

b1: 〈SB2-11・12〉 口縁部が長く伸びて外反するもので、頸部はくの字状に屈折し、最大径を上半にもつ卵形の胴部形態を呈する。

b2: 〈SB1-7〉 口縁部が短く外反し頸部のくびれがややゆるやかであり、最大径を上半頸部よりもつ卵形の胴部形態を呈する。

b3: 〈SB2-13〉 口縁部が短く外反し頸部のくびれはややゆるやかであり、最大径を中位近くにもつ胴部形態を呈する。

## (2) 土器群の系譜

分類した土器群にはかなりバラエティーに富んだ内容が認められるが、その様相は次の2つの系譜によって類型化される。

**A系** 在地の弥生後期箱清水式土器の伝統的要素と、それを受け継いだ発展的要素を有する土器群。

**甕 a** 箱清水式にみられる胴下半部にくびれをもつ形態を受け継いでいるが、胴上半が球形化するものであり、類例は御屋敷遺跡Y-6号住(森嶋 1978)・四ツ屋遺跡9・17・24・30号住出土資料(長野市教委 1980)に求められる。御屋敷遺跡、四ツ屋遺跡9号住資料には櫛描文による加飾が施されている。

**甕 b** b<sub>2</sub>に関しては箱清水式にみる壺形に近い赤色塗彩された壺(深鉢)に系譜を求める

ことができる。b<sub>1</sub>の類例は四ツ屋遺跡9号住出土資料中に見られるがその出自は不明である。

**高坏 a** 脚端を欠き全形を知ることはできないが、赤色塗彩され脚部が伸長する形態は箱清水式の高坏に共通する。

**甗** 箱清水式においてはこの種の鉢形有孔土器（岩崎 1966）は普遍的にみられ、形態的にもほとんど差がないと言ってよい。

**鉢** 赤色塗彩された大形の鉢は箱清水式にもみられるものであるが、折り返し状口縁の手法は知られておらず外部からの影響を考慮すべきかも知れない（注1）。ここでは赤彩される鉢としてA系とした。類例には四ツ屋遺跡24号住出土の無彩のものがある。

**甗 a** 中部高地型甗描文（笹沢 1978）を施文するもので、箱清水式における施文と同一の手法であるといえる。形態的には箱清水式甗にみられる口縁部が長く外反する特徴を踏襲しているが、頸部におけるくびれが強くてく字に屈折するa<sub>2</sub>の特徴と、胴部上半の最大径（肩部）における張りが強くなっている点はその発展形態として把握することができる。また口縁端部が面とり・内湾する点は箱清水式において顕著な手法ではないが、類例には四ツ屋遺跡17号住出土資料がある。

**甗 b<sub>1</sub>** 形態は口縁端部が直である点以外a<sub>2</sub>と類似する。整形は不明であるが箱清水式と同様の内面・胴下半ヘラミガキ調整が考えられ、類例には灰塚H-1号住出土の大形品（更埴市教委1971、注2）があげられる。

**甗 b<sub>2</sub>b<sub>3</sub>** 箱清水式の伝統的要素は抽出できなかったが、b<sub>1</sub>が更に変容した形態と考えてA系とした。

**B系** 在地の弥生式土器の中からは導き得ない外来的要素の強い土器群。

**埴 a** いわゆる小形丸底埴形土器と同系列の土器と考えられ、その出現前の祖型とも言われているものに類似している（注3）。新知見の器種であり類例を知らない。

**埴 b** この種の土器も埴aと同系列であることが予想されるが出自は不明である。形態・整形に箱清水式から導き得ない特徴が認められることからB系とした。

**高坏 b** 箱清水式の代表的高坏は有段の坏部と長く伸びた脚を有する赤色塗彩品が知られているが、それとの類似性はb<sub>1</sub>における赤色塗彩のみである。b<sub>1</sub>は坏部下半に段を有しており、脚部が内湾する特徴をもつ。その祖型としては伊勢湾岸地方穴山式の大形高坏が考えられる。b<sub>2</sub>も脚部が内湾する点類似が認められるが全体的に形態が大きく変化しており例品を知ることができない。b<sub>3</sub>は脚部が外反するが、脚が著しく減少化している点は他地域からの影響によるものと考えられる。

**高坏 c** 小形の坏部と裾広がりに大きく開いた脚部を有する高坏は、伊勢湾岸地方元屋敷式にその祖型を見ることができる。c<sub>1</sub>の類例には灰塚H-1号住出土品（注4）があるが、本例には脚部透し穴が認められない。c<sub>2</sub>には類例がないが、やはり同系列のものと考えてよいだろう。

**器台** 箱清水式末期(注5)に出現したとされているものであるが、確実な資料としては灰塚遺跡H-1号住、四ツ屋遺跡溝址13の調査例がある。本例は器受け部と脚部が貫通せず脚端が内湾する点では類例が知られていない。器台は小形丸底埴とともに土師器のメルクマールとさえ言われたものであり、当然のことながら在地の弥生土器からは生じ得ないものである。

**台付注口** 箱清水式には鉢に片口を付したものがよく見られるが、本例は台付甕形土器に注口を付したような形態であり新知見と言えよう。四ツ屋遺跡9号住からは台付深鉢形土器に片口を付したものが出土しており同系列におくべきものと思われるが、その出現に関しては他地域の影響が考えられるところである。

### (3) 土器群の編年の位置

A系、B系の系譜と類例をみれば、その編年の位置が弥生土器から土師器への接点に求められることは自明である。善光寺平における該期の土器編年は、箱清水式→御屋敷式→善光寺平第1様式という編年が確立しつつある段階であるが、御屋敷式自体への評価が一定していないのが現状であり、更に検討の余地がありそうである。

御屋敷式土器は、「濃尾平野からの指向であるS字状口縁台付甕形土器が侵入することによって箱清水Ⅱ式土器である土着の土器はにわかに変容してきたもの」と把握されている(森嶋 1978)が、外来系器種の侵入がここで述べたB系の出現にあたるのであれば、本土器群は御屋敷式の範疇に含まれることになる。また既調査例では四ツ屋9・17・24号住、溝址13の土器群もまた御屋敷式として把握することが可能である。しかしここで注意すべきはA系における発展的要素が外来的要素とは無関係ではなく、B系もまたA系と同じく独自の発展要素を内包している点にあり、新しい器制を受け入れながらも在地の弥生土器の伝統的要素を主体として変容している姿を見ることができる。この意味において、御屋敷式土器の内容を確定する上でも、外来的要素の抽出とともに箱清水式土器の伝統的要素の抽出、つまり箱清水式土器の末期的様相を地域における弥生土器から土師器成立という流れの中で把握する必要があるといえる。

善光寺平における箱清水式土器の変容の第1段階を示す様相として四ツ屋遺跡17号住の資料があげられる。この資料中壺においては胴部球形化が顕著であり既に壺aへの移行が進み、甕においても壺aに特徴的な口縁部の屈折と肩部の張り出し傾向が認められる。しかし高坏においては箱清水式における有段の坏部を有するものが若干の形態変化をもちながらも腫在である点など、全体的に総括すれば箱清水式の伝統的要素が強く保持されている様相を呈しているといえよう。注目すべきはこの住居址が一辺3mの小形方形住居であり、箱清水式における長方形住居から逸脱している点である。また住居址床面よりS字状口縁台付甕の破片が検出されており、本様相中にそれが共伴する可能性を指摘することができる。

今回の調査により把握した土器群は変容の第2段階に比定されるものであり、類似の様相には四ツ屋遺跡9号住、24号住、溝址13があげられるがそれぞれに変異が認められ、今後2分し

て考えることもできそうである。この段階においては外来的要素をもつ新たな器種の登場に代表されるB系が確実に台頭しているとともに、A系において櫛描文を施文する壺a、甕aが存在する一方でそれを消失した甕bが成立するというような多面的様相を示している。この様相を言いかえるなら箱清水式的器種構成が崩壊してゆく中でその再編成が行なわれている段階といえよう。

変容の第3段階には善光寺平第一様式として把握されている灰塚遺跡H-1号住資料の様相をあてることができる。この段階には甕はbから更に変容をとげたbが主流となっており、畿内布留式には確実に出現していたとされる小形丸底埴が伴う段階であり、箱清水式土器変容の最終段階の様相を見ることができる。この段階において赤色塗彩・櫛描文という箱清水式的加飾要素は失われたと思われる。

以上の所見より本土器群は、箱清水式伝統的要素が変容をとげ外来的要素を加えながら再編成されてゆく過程を示し、灰塚遺跡H-1号住資料より一段階古く編年されるべきものであると考える。灰塚遺跡H-1号住資料が畿内布留式併行期と考えられるなら、本土器群は布留式以前あるいは布留式古相に併行することになろう。

(青木 和明)

(注1) 御屋敷遺跡Y-4号住をはじめとしてこの時期に折り返し状口縁をもつ壺が数例存在しており、この手法の系譜については注意を要するところである。

(注2) 報文においては壺形土器Dとされているものであるが、実見によれば整形手法に箱清水式甕の伝統的要素を観察することができ、形態的にもその系譜上にあるものと考えている。なお中～小形の甕形土器B・Cは胴部最大径が中位にある点bとは区別されbに近い形態と言える。

(注3) 口縁部に段を有する点など北陸系か伊勢湾系の影響が考えられるがにわかには判断はしがたい。

(注4) 報文における高坏形土器A

(注5) 笹沢 浩氏によれば御屋敷式(笹沢 1977)、花岡 弘氏によれば箱清水Ⅱ式(花岡 1979)にその可能性が指摘されている。

土器観察表 第1号住居址(第5図)

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴		胎 土	焼 成	色 調		出 上 状 態	遺 存 度
		器高	口径	底径		外 面	内 面			外 面	内 面		
1	埴		8.4		口縁部短く外反	口縁部ヨコナデ、胴上半ナデ下半左回りヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	砂 粒	良好	黄褐色	灰褐色	床 面	底部欠損 $\frac{1}{2}$
2	高杯	8.2	12.4	15.0	坯部やや内寄、脚部強く外反	ハケ後ヘラミガキ	坯部ヘラミガキ 脚部ハケ後ヘラミガキ (ヘラミガキ)	*		赤褐色	黄褐色	*	脚部 $\frac{1}{2}$ 欠損 ほぼ完形
3	*	11.8	18.6	11.6	坯部ゆるやかに内寄 脚部外反	坯部ゆるやかに内寄 脚部ヨコナデ	脚内シボリ痕ハケ 埴部ヨコナデ	砂 粒 小 石		黄褐色	灰褐色	*	坯部 $\frac{1}{2}$ 欠損 ほぼ完形
4	*			10.6	脚端部面取り、やや内寄	ハケのちヘラミガキ	ナデ	砂 粒	良好	灰褐色	黄褐色	覆 土	脚部 $\frac{1}{4}$
5	埴					頸部ヨコナデ、胴部ナデ	頸部接合痕	*		灰褐色	灰褐色	*	頸部 $\frac{1}{4}$
6	壺	13.8	13.2	5.4	口縁部直に開 端部面取り	口縁部ヨコナデ ハケ後(ヘラミガキ)	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 頸部ハケ、胴部指頭ナデ	*	良好	黄褐色	黒褐色	*	ほぼ完形
7	甕	19.4	16.0	6.2	口縁部くの字、やや外反 胴部卵形	口縁部くの字、やや外反 胴部卵形	口縁部ハケ、胴部指頭ナデ (ハケ)	砂 粒 小 石		赤褐色	黄褐色	床 面	*
8	*	(17.0)	13.8	4.8	口縁部くの字、つよく外反 胴部卵形	口縁部液状文2段 胴部液状文	頸部接合痕 胴上部ビョウサエ後ナデ (口縁部ツマミ上ケ)	*		赤褐色	黒褐色 黄褐色	*	$\frac{1}{2}$
9	*		16.2		口縁部端部面取り 口縁部つよく外反	口縁部液状文2段 (脚部襷文)	口縁部ツマミ上ケ ヘラミガキ	砂 粒		灰褐色	黒褐色	覆 土	$\frac{1}{2}$

第2号住居址(第7図)

1	壺			5.2	胴下半において最大径、やや内寄して底部に至る	胴中位ヘラミガキ	胴中位ナデ	砂 粒 小 石		黄褐色	赤褐色	柱穴土	胴下半 $\frac{1}{2}$
2	短箱壺	12.4	12.0	3.6	最大径胴中位、口縁部外反	赤彩・ヘラミガキ	(口縁部・赤彩ヘラミガキ)	*		赤褐色	黄褐色	床 面	$\frac{1}{2}$
3	埴	8.6	11.0	2.6	口縁部肥厚してやや内寄 肩部の字に張る	口縁部肥厚してやや内寄 肩部の字に張る		*		*	赤褐色	*	完 形
4	高杯		17.0		坯部ゆるやかに内寄(脚部外反)	赤彩ヘラミガキ	(坯内赤彩ヘラミガキ) 脚部ホソ結合	*		*	黄褐色	*	脚端欠損 ほぼ完形
5	*	12.4	22.8	10.4	坯部ゆるやかに内寄 脚部端内寄	坯部中位ハケ	(坯内ヘラミガキ)	*	良好	黄褐色	*	*	坯部 $\frac{1}{2}$ 欠損 ほぼ完形
6	*			(11.0)	脚端部ゆるやかに外反	ヘラミガキ	接合痕	砂 粒	*	茶褐色	茶褐色	*	脚部 $\frac{1}{4}$
7	器台	9.0	8.8	11.0	坯部やや内寄、脚部4孔 脚端部内寄	坯部やや内寄、脚部4孔 脚端部内寄	脚内接合痕2	砂 粒 小 石		赤褐色	黄褐色	*	ほぼ完形
8	鉢	13.0	26.6	10.8	口縁部折り返し・ゆるやかに内寄、底部やや上げ底	ハケ後赤彩ヘラミガキ	赤彩ヘラミガキ	*	良好	黄褐色	灰褐色	*	*
9	瓶	7.0	13.6	3.6	口縁部やや内寄 底部1孔径9mm	ハケ後ヘラミガキ		砂 粒		赤褐色	赤褐色	*	*

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴		胎 土	焼 成	色 調		出 土 状 態	遺 存 度
		器高	口径	底径		外 面	内 面			外 面	内 面		
10	台付注口	13.6	9.8	8.8	口縁部やや外反、注口径1.8 胴部球形、胴部やや内寄 口縁部くの字、ゆるやかに外反		胴部ケズリ様ヘラミガキ	砂粒小	良好	黄褐色	灰褐色	+	注口一部欠損 完形
11	甕	19.4	15.6	6.4	口縁部くの字、ゆるやかに外反			+		赤褐色	黄褐色	+	ほぼ完形
12	*	14.8	12.3	(5.0)	口縁部くの字、ゆるやかに外反		(ナデ)	+		茶褐色	黒褐色	+	底部 $\frac{1}{4}$ 欠損 ほぼ完形
13	*		15.6		口縁部くの字、つよく外反	ハケ	(ナデ)	+		黄褐色	赤褐色	+	胴下半欠損 $\frac{1}{4}$
14	*		19.0		口縁部ゆるやかにくの字 端部内寄	口縁部クシ編波状文3段 胴部兼伏文3回止め×4 胴上部波状文3段以上 (胴中部以下ヘラケズリ)	(口縁端部ツマミ上げ) ヘラミガキ	+		+	黄褐色	+	胴下半欠損 ほぼ完形

土埴 (第15図)

1	壺			(8.4)	口縁端部内寄、坏部有段 脚端部内寄	ヘラミガキ		砂粒		茶褐色	茶褐色	疵	底部 $\frac{1}{4}$
2	高坏	12.2	18.6	11.2	口縁部ゆるやかに内寄、底部近くややくびれ底部1孔径1.1cm	赤彩ヘラミガキ	坏内赤彩ヘラミガキ 胴内ナデ、端部ヨコナデ	砂粒小		黄褐色	黄褐色	+	完形
3	瓶	11.8	18.0	4.2	坏部ゆるやかに内寄	ナデ、底部近くヘラケズリ	ナデ	+		+	+	II 層	+
4	高坏		18.4		坏部内寄、下部にわずかな段 脚部つよく外反	口縁部ヨコナデ、ハケ	口縁部ヨコナデ	砂粒	良好	灰褐色	灰褐色	+	口縁部 $\frac{1}{4}$
5	*	8.2	11.2	15.4	口縁端部内寄	口縁部ヨコナデ ヘラミガキ	坏内ヘラミガキ 口縁部ヨコナデ	砂粒小	+	黄褐色	黄褐色	+	胴欠損 ほぼ完形
6	*		29.4			赤彩ヘラミガキ	赤彩ヘラミガキ	砂粒	+	黄褐色 灰褐色	黒褐色	+	杯部 $\frac{1}{4}$

遺構外 (第20図)

1	甕		15.8		口縁部くの字にやや肥厚	口縁部ヨコナデ 胴~胴部ハケ		砂粒小		茶褐色	茶褐色	満上遺構上面	口縁~胴上半 $\frac{1}{4}$
2	高坏				坏部下半に段			砂粒		赤褐色	黄褐色	+	杯部上半・脚部を欠損

## 第4章 E地点遺跡

### 第1節 遺構と遺物

#### 1 概要 (第22・23図)

調査区は土京川左岸、海拔高度 468～406 m 付近のバイパス路線中90mを対象とし、遺構と土層の確認のため2 m巾のトレンチを3本設定した。

地盤は予想に反して軟弱で車両の乗り入れもままならないほどで、地表下約1 mにおいては湧水もみられた。トレンチ掘り上げの段階では遺構・遺物の存在は確認できなかったが、土層断面図作成の過程において、第1・3トレンチ内より布目瓦破片各1点が出土し、断面に階段状の土層が確認された。

#### 2 トレンチ内土層 (第24・25図)

調査区域の土層序はかなり複雑な様相を呈している。このため各トレンチにおいての土層の統一理解を目的として、各土層の土質を優先させて下記のように整理した。

- a<sub>1</sub>: 茶褐色砂礫質土
- a<sub>2</sub>: 茶褐色砂質土
- b<sub>1</sub>: 黄褐色砂礫質土
- b<sub>2</sub>: 黄褐色砂質土
- c<sub>1</sub>: 黒褐色土 (小礫を含む)
- c<sub>2</sub>: 黒褐色土 (c に比して灰色をおびやや粘質)
- d<sub>1</sub>: 灰褐色砂礫質土
- d<sub>2</sub>: 灰褐色砂質土
- e: 黒色粘質土 (植物遺体を含む部分もある)

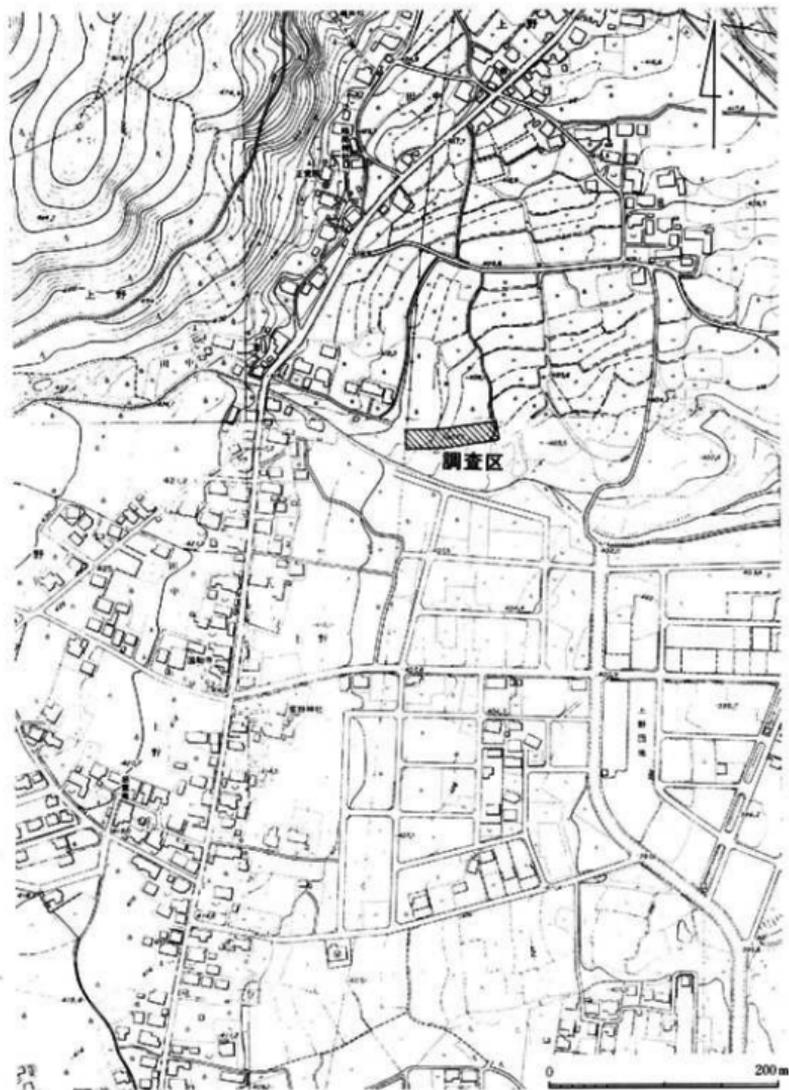
#### 第1トレンチ (第24図)

地表下70～100 cm で e に至る。e は土京川よりのトレンチ東側では10cm足らずの薄い堆積となっており、下に d<sub>1</sub>・d<sub>2</sub>が続いていることが確認できた。e 面トレンチ中央部と西端には約30 cmの比高差をもつ階段状の起伏が観察でき、その他の面はほぼ同一レベルの平坦面となっている。

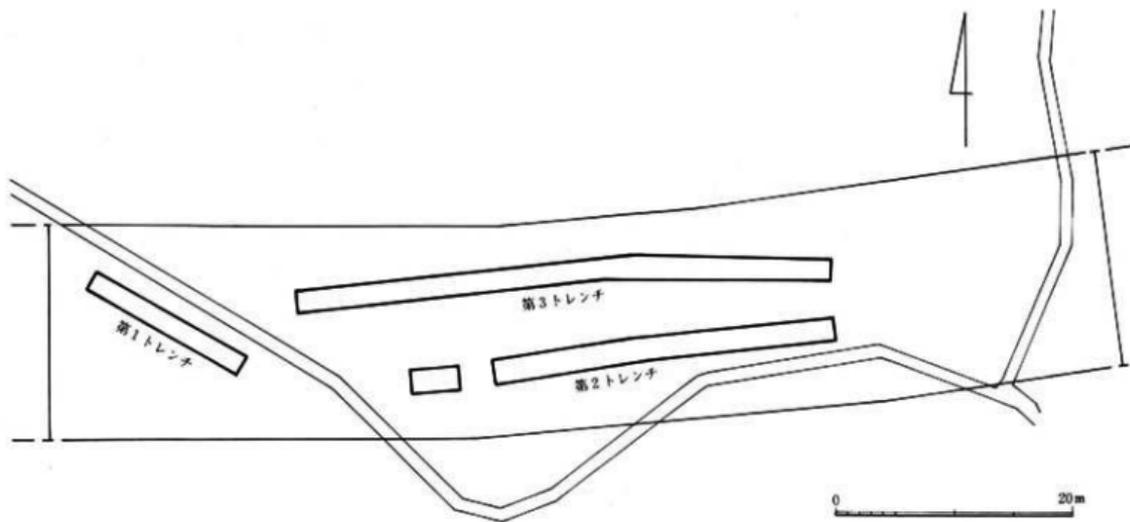
a<sub>1</sub>から e の間には、c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>をはさんで上部に b<sub>1</sub>、下部に b<sub>2</sub>・d<sub>2</sub>が堆積している。布目瓦破片(第26図2)は上部 b から出土した。

#### 第2トレンチ

c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>面に階段状の起伏が2ヶ所に見られたが、トレンチ掘削は深さ1 m程度であったため



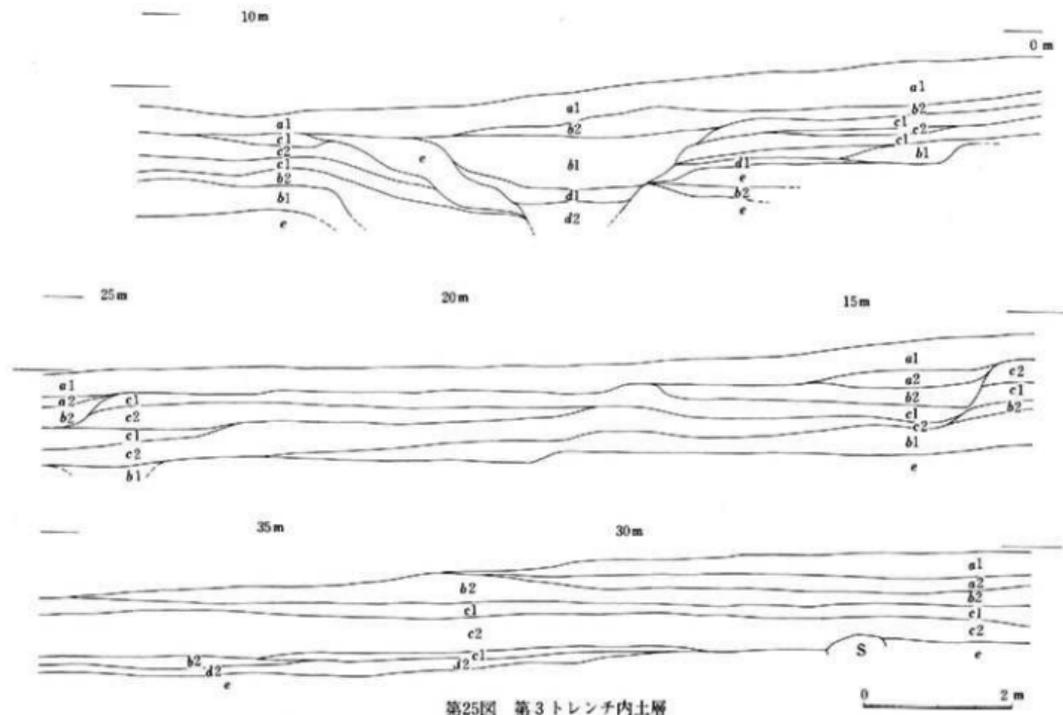
第22図 E地点遺跡地形図



第23図 E地点遺跡調査区全体図



第24図 第1トレンチ内土層



第25図 第3トレンチ内土層

e面を検出するには至らなかった。部分的に深掘りした所見によれば、1.2～1.3mでeが現われ40cmほどの堆積を示し、その下部は青灰色をしたセメント状の砂礫層が厚い堆積をみせていた。

### 第3トレンチ（第25図）

トレンチ西端から1m地点地表下1.1mでe面が確認でき、比高差30cmの階段状の起伏が認められた。a1とeとの間には、第1トレンチでの所見とほぼ同様にc1・c2の上下にb1・b2がみられた他、e上面にd1e中にb1の堆積が確認された。

4～8m地点には大きな落ち込みがみられ、b1・d2が厚く堆積している。

e面での階段状の起伏は19m地点においても確認されたが、13・25m地点においてはc1・c2面の階段状起伏がみられ、更に18m地点では20cm高の隆起が認められた。この隆起から25m地点の階段状起伏までの間にはc1上部のb1の堆積はないが、やはりb1・b2がc1・c2をはさみ込んでe面に至っている状況が観察される。この場合も階段状起伏間c1・c2面には比高差がほとんど認められなかった。

25m地点以後土層に目立った起伏は表われていないが、a1・a2は34m地点において、bは38m地点において消滅し、地表にはe面が現われる。またc1下部のb1は22m地点において消滅していたが、30m地点においてd2、36m地点でb2の堆積が現われる。この間のe面はやはり比高差をほとんど有さない平坦面となっているが、e面は28m地点の礫を境に現地表と同様の傾斜を示すようになる。

出土した布目瓦破片（第26図1）は28m付近のb2から検出された。

### 3 遺物（第26図）

検出された遺物は布目瓦破片2点のみである。いずれもかなり磨滅した状態であるが平瓦と考えられ、上面に布目痕・横骨痕、下面に縄目敲打痕がみられる

## 第2節 成果と課題

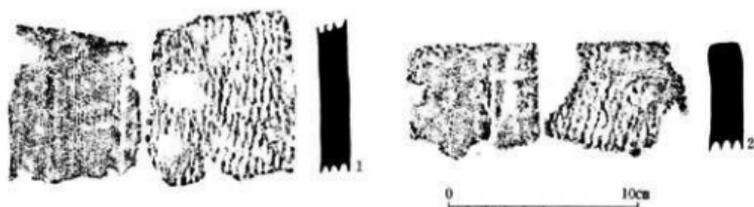
### 1 土層堆積のあり方と階段状遺構の性格について、

今回の調査で設けた3本のトレンチ内において上下2面の階段状遺構が検出されたわけであるが、それらは比高差20～60cm長さ10m内外でほぼ平坦に整形されていることが明らかになった。こと遺構に伴う遺物が皆無であり、トレンチ発掘のみで平面形も把握していないため、あくまで推測の域を出ないがその性格について若干の考察を述べてみたい。

前節において土層をa1～eに整理したが、これを更に検討すると次の2型に分類することが可能である。

a b d型：砂礫質でしまりがなく土京川の氾濫によると思われる急激な堆積状況を示すものが多い。

c e型：黒色系の色調を呈し粘質でa b d型に覆われる埋没土と考えられる。



第26図 トレンチ内出土遺物

上下2面に存在する階段状の遺構はいずれもc e型において形成されており、a b d型とは互層の関係にあることがわかる。つまりe面において階段状遺構が形成された後a b d型によりそれに埋没し、新たにe面に同様の遺構が形成され、ふたたび埋没して現在に至っているということが言えそうである。この現象からc e型面の階段状遺構を田畑などの耕作地として理解することもまた可能であろう。

遺構の埋没原因として考えられるのは土京川による氾濫である。近年では昭和初年に土京橋が流失して調査地一帯が水に浸る水害があったとの話であるが、その時の被害は田畑を埋め尽すほどのものではなかったとのことであり、遺構埋没と上部a b d型の形成はそれ以前に求められることになる。ただ土京川沿岸がたびたび水害の難にあってきたことは充分可能性のあることである。寛保2年(1742)の洪水被害を記録した「御領分四郡荒所絵図」(長野市立博物館所蔵)には、旧上野村330石中54石近くが荒地になった様子が記されており、かかる水害についての文献等による検討も必要となってくるところである。

## 2 布目瓦について

若槻田中付近において布目瓦が出土することはかなり以前から知られており、近年まで土京川のほとりで採集できたという話を聞いたが、現在までに確認されている瓦窯跡には東沢窯跡と田中窯跡の2つが知られている(米山一政 1978)。東沢窯跡からは古式の善光寺瓦が出土しているが、田中窯跡からは奈良末～平安時代初期のものと思われる縄目文を有する瓦が出土しているとのことで、手法的に今回検出したものと共通性が認められる。

このことから検出された2点の瓦破片は土京川によって上流より運搬されてきたものと考えるのが妥当であるが、既発見の田中窯跡は土京川から約200m北方の山腹にあたるため、それより川沿いの山腹にも他の瓦窯跡が群在している可能性は高いと考えられる。

(青木 和明)

## 第5章 結 語

昭和56年度において長野市教育委員会と長野市遺跡調査会が実施した県道牟礼長野線バイパス建設に伴う緊急発掘調査報告書をここに世に出す。内容において充分なものとはいえないが、調査後半月程で刊行できたことは一重に調査に携わった関係各位の努力と援助の賜とと思っている。私は常々緊急発掘の成果は早ければ早い程良いと考えている。とみに緊急発掘に携わっている人達には次から次へと発掘調査が待っていると思考されるからである。これにもまして調査担当者は自分の専門としている分野にあたるのが少なく、調査成果をもてあますことが多々ある。これらを一刻も早く世に出し、多くの人達に使ってもらえば考古学研究者としての喜びの一つではないかと思うまた責務だと考える。ただそれには最低必要な資料を提示する必要があるし、調査した時の生々しい記録を残す必要があると考える。そしてもう一つ早い時期にまとめるという成果に消極的要因ではあるが、書きグセがつくということが上げられるし、自分自身勇気づけられる面を多分に含まれている。

こうした意味で、若い研究者の手により本書が世に問うた価値が大きい。そして本書の特色として、本文中に考察が加っていることがあげられよう。執筆者にとって研究主題と合致した故もあるのであるが、予算の関係で限られた枚数におさえてしまい、充分な内容でない点残念であるし、お許し願いたい。今後の研究に期待したい。

さて今回の調査での総括の意をこめて第3・4章第2節で触れていない点を記してみたい。

### ☆

まずA地点の縄文時代前期の遺構である。従来洩川扇状地展開面には縄文時代遺跡はないとの考え方が一般的であった。そしてこの扇状地をとりまく山麓部に点々と前期を中心として散在する意味を解く一つの鍵を呈示したともいえる。また第3号住居址は1時期1遺構の検出で編年研究上重要な一括資料であり、善光寺盆地においては初源の生活遺構である点注目される。ただ単純な疑問として、炉施設は覆土中に多量の炭化物の存在から、覆土は明確な柱穴が認められないことから単純なものがそれぞれ想定できるものの、この遺構の性格が何であろうかということと、土器の口縁部底部が検出されないのはどうしてであろうかということである。次に集石址についてである。この遺構の様相をみるに押型文土器に伴う集石炉のあり方に近似する。しかし時期を決する該期の土器が調査地内どこからも確認されていない。ただ円形偏平磨石そして特殊磨石の存在から縄文時代早期の遺構の可能性がある。やはり、第3号住居址の性格を考える上で重要な位置を占めると思われる。

古墳時代初頭に比定される第1・2号住居址そして土城の遺構・遺物の発見は特記すべき問題をはらんでいる。その詳細は第3章第2節を参照にされたい。即ち該期の遺構・遺物は限定された範囲の一時的なものと考えられてきたが、今回の調査結果から善光寺平においてかなり

の広がりや文化圏をもつものと考え方を転換した方がよいように思える。それはこの地においては御屋敷式から灰塚期として呼称されているが、この間に位置される遺跡が最近明らかになりつつあり、これもまた第3章第2節で述べたとおりであり、未発表資料に千曲川右岸の五輪堂遺跡・左岸で篠ノ井遺跡群（聖川堤防地点遺跡）がある。今回思ってもみない扇状地からの確認であり、今後資料が増加するものと考えられる。また住居址も小形化し方形に近く、そして方形になるという歩みもうかがえる好資料といえよう。また土城も住居址と同時期のもので、覆土には完形に近い高環形土器・器台があることに注目され、底部に円孔ある甕が出土していることにたいし、方形周溝墓の隆成期をかんがみる時、うがった見方であろうが、注意されるあり方である。

☆

E地点遺跡では生活址を検出することができなかった。地形的に見て一土京川扇状地端部の段丘高地・土京川左岸・水田（湿地面）を臨む一好条件の遺跡と見ていたが、この地形は意外と新しく形成されたことが調査の結果新知見を得たことは、前章にみるとおりである。しかし、出土地点は定かでないが、縄文前期の諸磯系土器が確認されている。河川にまどわされたもののこの土京川扇状地上に縄文期から考古学的意味の平安時代までの土器等が採集され先住民の息吹を見ることができる。この意味で、吉古墳群と所謂善光寺瓦窯址の存在価値が高い。90余基に及ぶ吉古墳群の成立背景がどこにあったであろうか、また前記古窯址の位置と形態等々未解決の問題が多い。この代表的なものにこれらをさきえた生活基盤たる遺跡の比定がなされていないことであり、周辺遺跡の調査を積極的に進めなければならない。こうした点からも今回の調査は、この地の地形的あり方の解明に寄与できたものと評価したい。

☆

これらの調査に引き続き次年度以降中間地点の遺跡であるB～D地点の調査が予定されている。今回の調査をふまえ更に良い成果が得られることを期待している。

最後に本書を上梓するにあたり、多くの皆さんからご援助をいただいた。特に博物館職員を中心に執筆者の方々の労を多といたしたい。あわせて衷心よりお礼申し上げます。

（矢口忠良）

## 引用・参考文献

- 青木秀雄他 1979 『風早遺跡』 庄和町風早遺跡調査会
- 石野博信・関川尚功 1976 『繩向』 奈良県立橿原考古学研究所
- 岩崎卓也 1966 「飯小考」 信濃18-4
- 岩崎卓也他 1971 『下条・灰塚』 更埴市教育委員会
- 岩崎卓也・関根孝夫他 1974 『諏訪原遺跡』 松戸市教育委員会
- 岡本 勇・塚田 光 1962 「栃木県藤岡貝塚の調査」 考古学集刊1-4
- 小野勝年 1953 「下高井地方の考古学的調査」 『下高井』 (長野県教育委員会) 所収
- 笹沢 浩 1977 「弥生土器・中部高地」 考古学ジャーナル 133・134
- ◇ 1978 「中部高地型櫛描文の系譜」 『中部高地の考古学』
- 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料』 第一巻
- 庄野靖寿他 1974 『関山貝塚』 埼玉県教育委員会
- 戸田哲也・大久昌彦 1979 「神之木式・有尾式土器の研究(前)」 長野県考古学会誌34
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編』
- 長野県町村誌刊行会 1936 『長野県町村誌 北信篇』
- 花岡 弘 1979 「信濃の古式土師器」 信濃28-4
- 林 茂樹他 1966 『上伊那の考古学的調査〔総括篇〕』
- 樋口昇一他 1976 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一諏訪市・その4-』  
長野県教育委員会
- 宮沢恒之他 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一諏訪市・その3-』  
長野県教育委員会
- 森嶋 稔他 1976 『長野県上水内郡誌 歴史篇』 上水内郡誌編集会
- 森嶋 稔 1978 「弥生式時代」 『更科埴科地方誌2』
- 森嶋 稔他 1981 『研究ノート4 箱清水式土器』 千曲川水系古代文化研究所
- 矢口忠良・星 龍象他 1980 『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』 長野市教育委員会
- 吉廻 純・大村 直他 1981 『神谷原 I』 八王子市市門田遺跡調査会
- 米山一政 1978 「信濃出土の古瓦再論」 『中部高地の考古学』

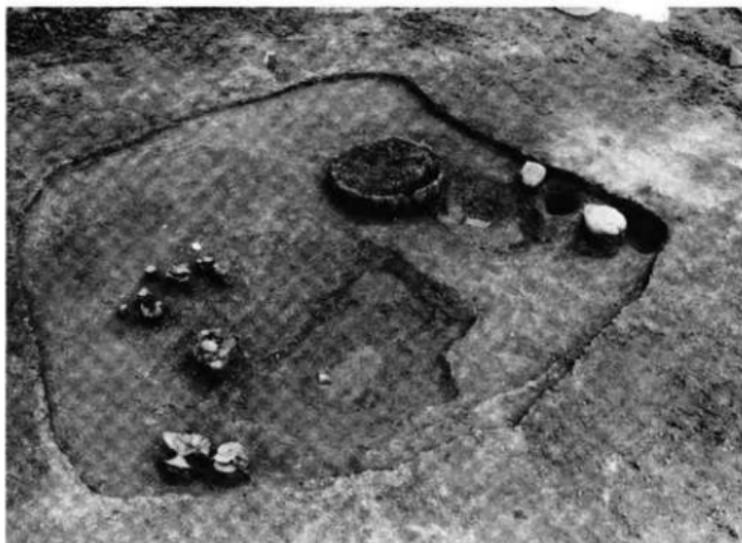
— 圖 版 —



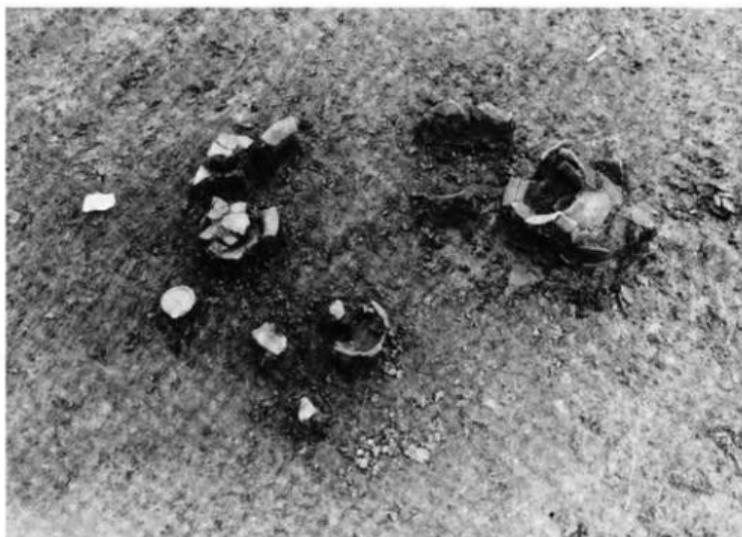
A地点遺跡調査前近景（南より）



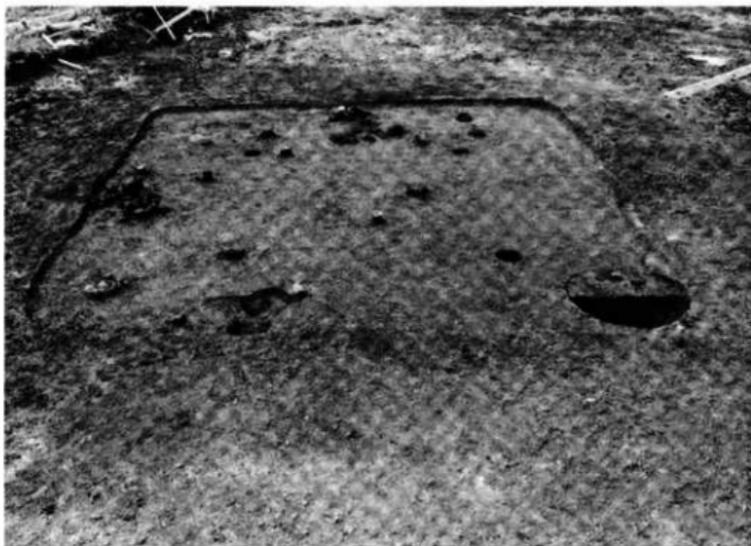
A地点遺跡調査区全景



第1号住居址



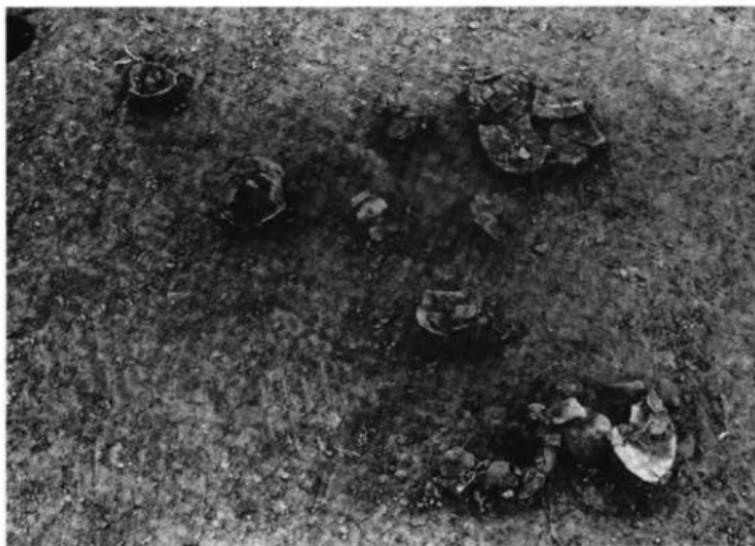
同遺物出土狀態



第2号住居址



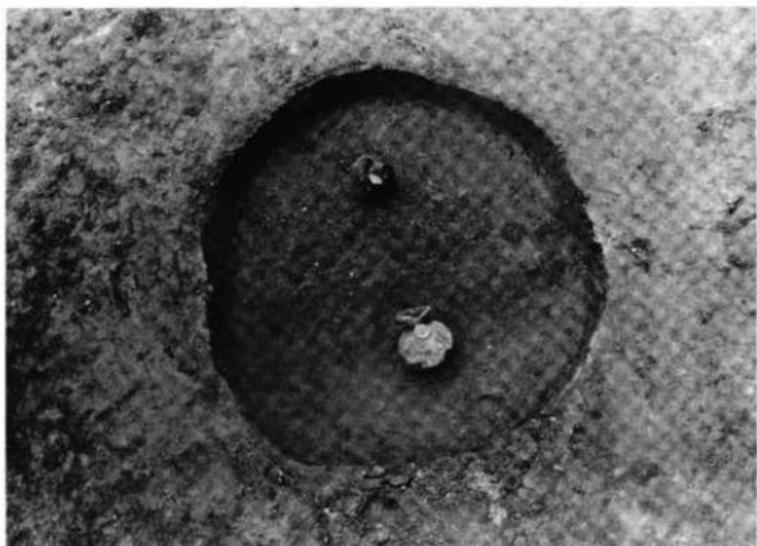
同遺物出土狀態



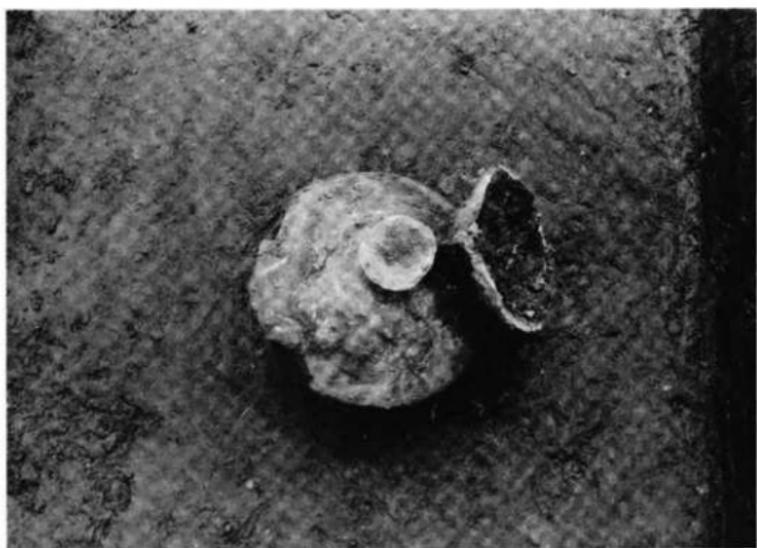
第2号住居址遺物出土狀態



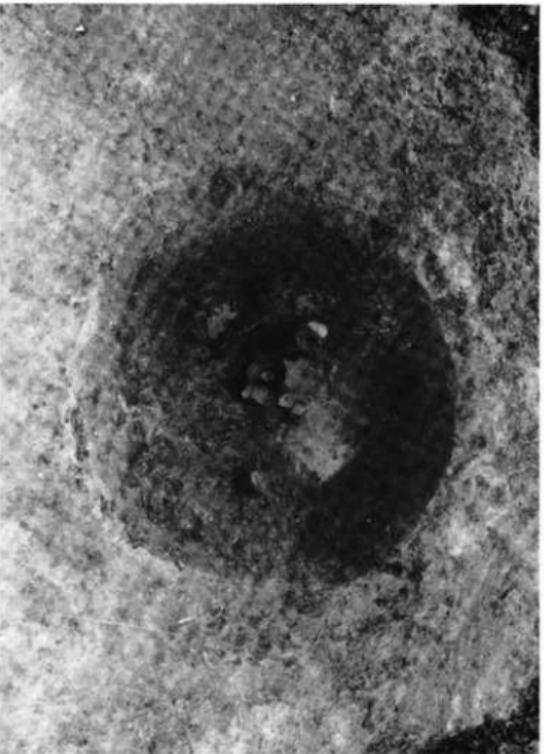
第3号住居址



土城 1



同遺物出土狀態



土城 2



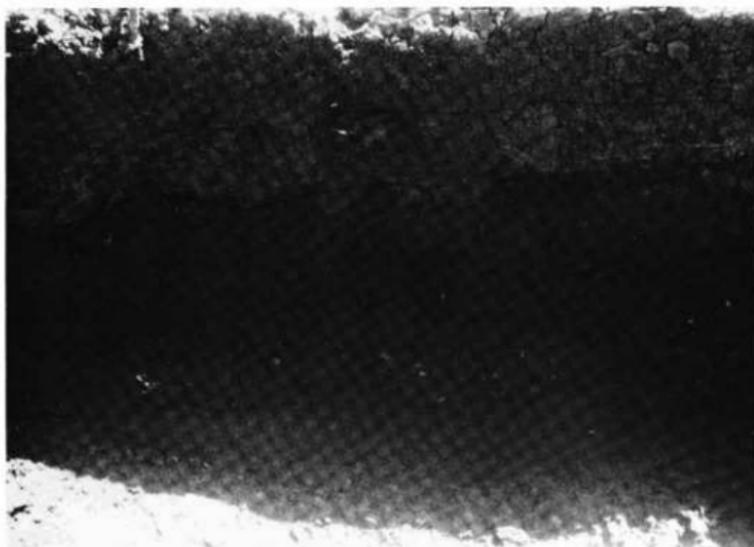
土城 4



集石址



完掘狀態



溝状遺構トレンチ内土層



調査後全景



1



2



6



3



8



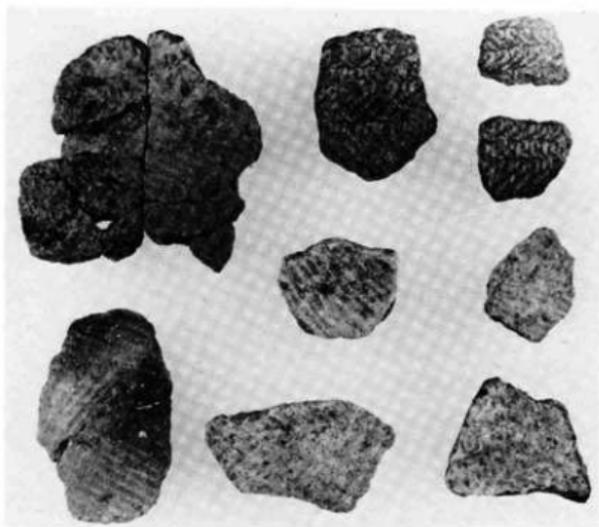
7



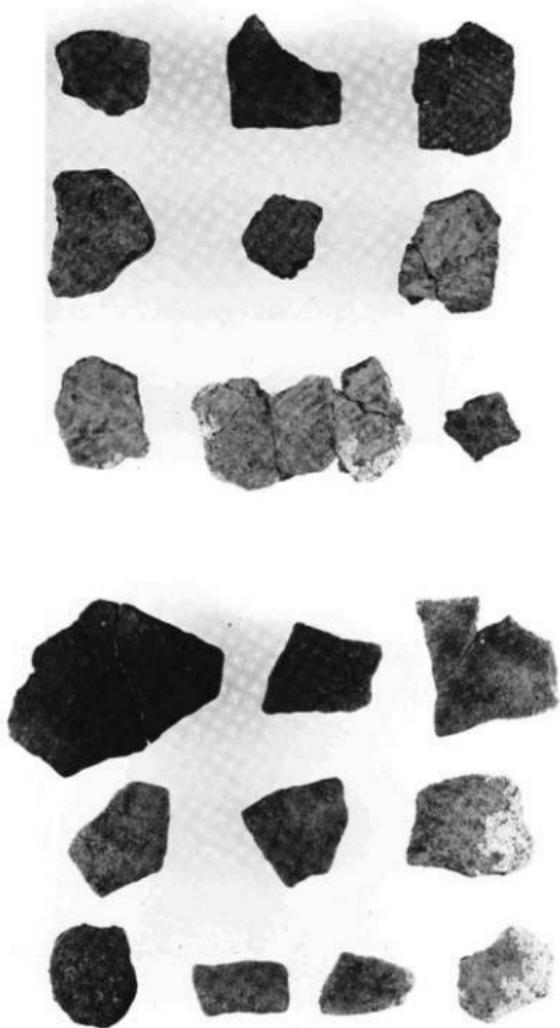




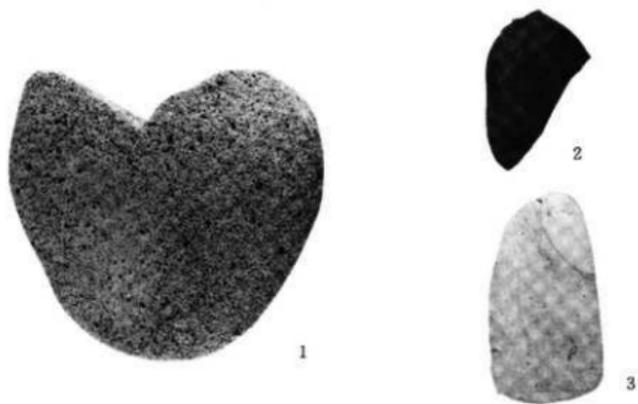
土城出土土器 (1:3)



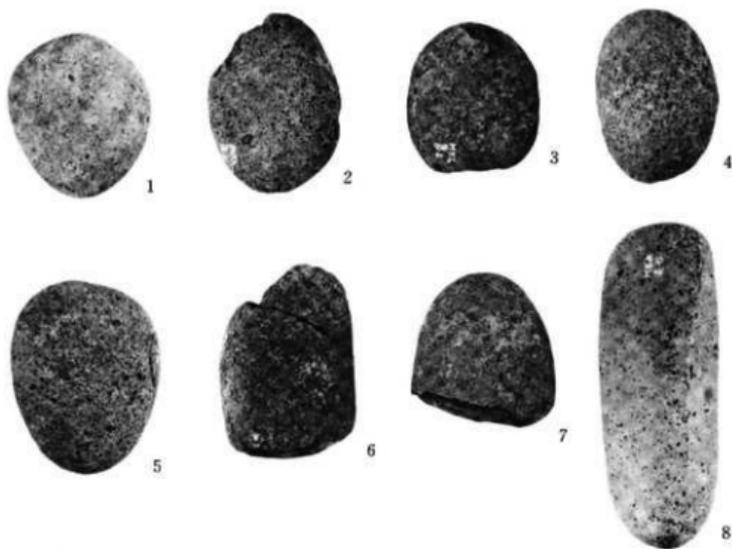
第三号住居址出土土器(1)



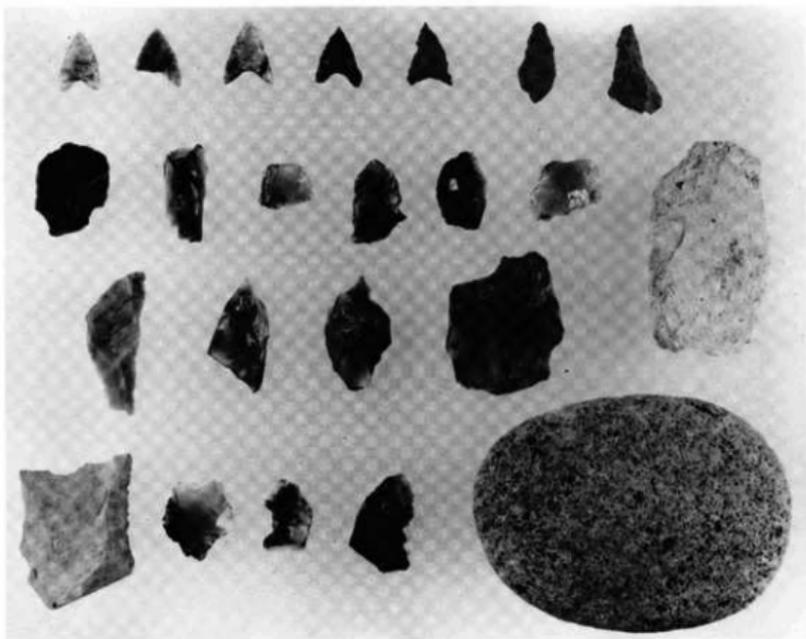
第3号住居址出土土器(2)



第2号住居址出土石器（1：3）



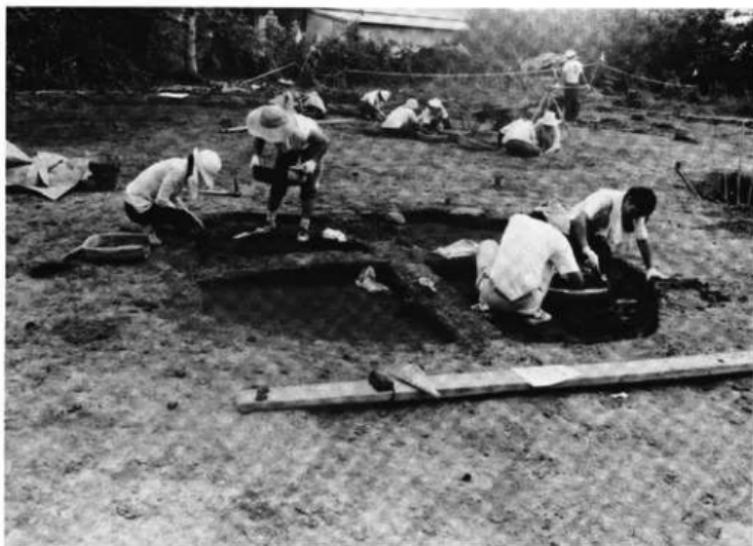
集石址出土石器（1：3）



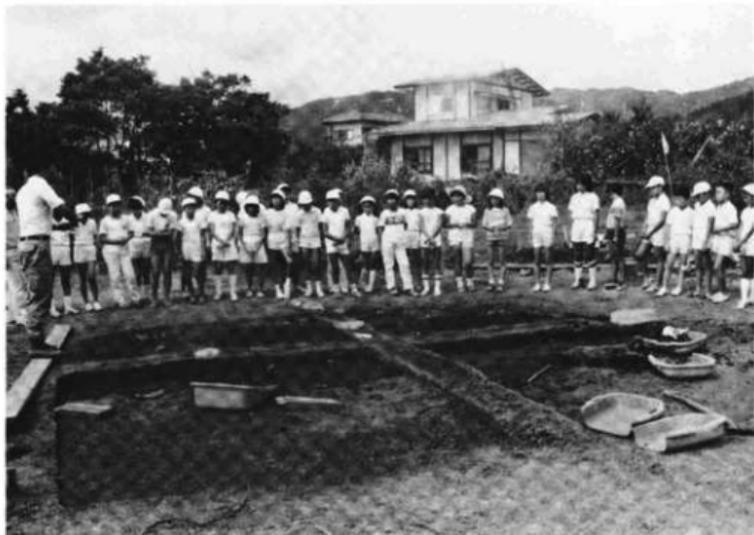
第3号住居址出土石器



遺構外出土石器



調査スナップ



若槻小学校見学会



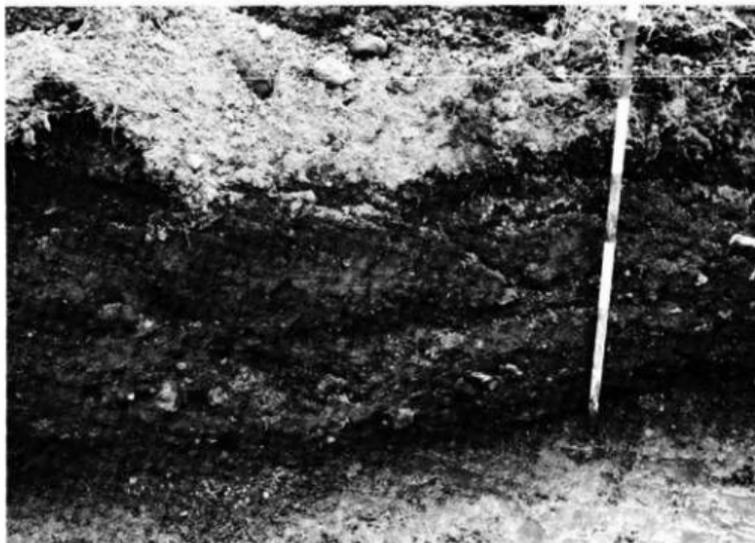
調査団



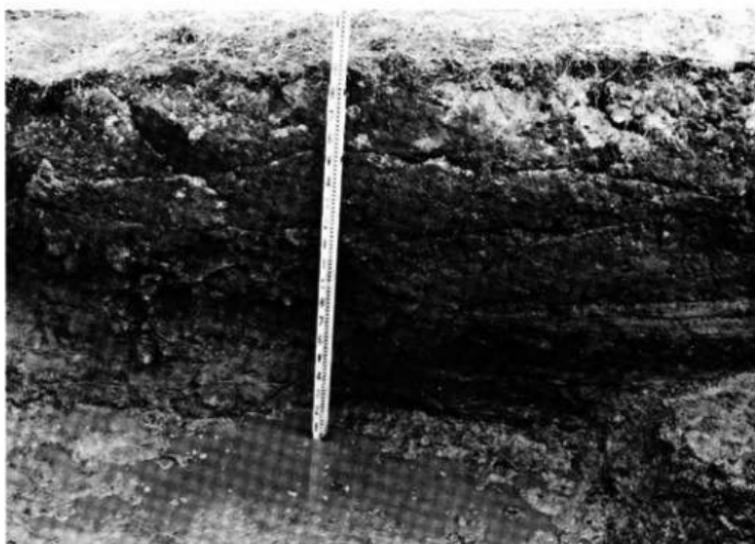
E地点遺跡調査前近景



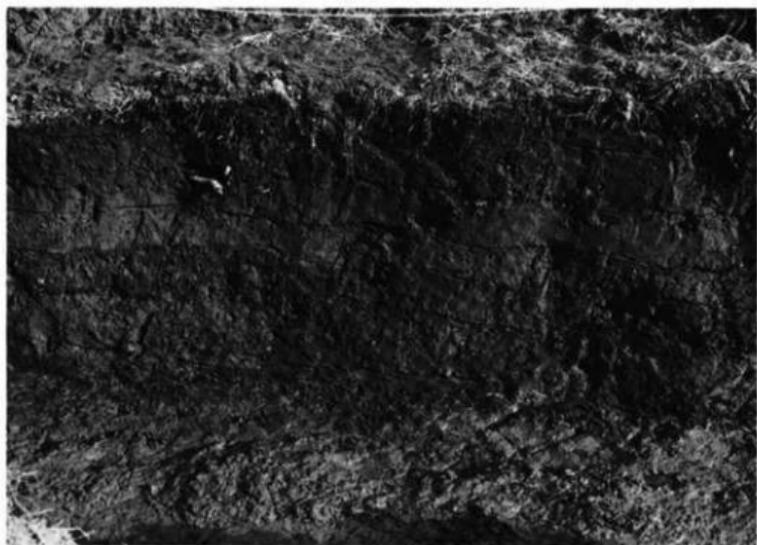
調査状況



第1トレンチ内土層



第3トレンチ内土層(西側)



第3トレンチ内土層（東側）

長野市の埋蔵文化財	第1集	「信濃長原古墳群」
*	第2集	「浅川西条」
*	第3集	「中村遺跡」
*	第4集	「塩崎遺跡群」
*	第5集	「塩崎遺跡群(2)」
*	第6集	「三輪遺跡一 付水内坐一元神社遺跡」
*	第7集	「田中沖遺跡」
*	第8集	「篠ノ井遺跡群」
*	第9集	「四ツ屋遺跡(第1～3次)」 「徳間遺跡」 「塩崎遺跡群(3)」
*	第10集	「湯谷古墳群」 「長礼山古墳群」 「駒沢新町遺跡」
*	第11集	「箱清水遺跡」 「大塚遺跡」 「大清水遺跡」

長野市の埋蔵文化財第12集

## 浅川扇状地遺跡群

一牟礼バイパスA・E地点遺跡一

昭和57年3月10日印刷

昭和57年3月25日発行

編者 長野市教育委員会  
 発行人

印刷所 長野市中越293  
 鬼灯書籍株式会社